

布教羅針盤

疫禍における
浄土宗のみ教えの説き方

令和4年度

ふきょうらしんばん



法然上人
浄土宗
開宗850年
お念仏からはじまる幸せ
令和6年

令和四年度 布教羅針盤

疫禍における浄土宗のみ教えの説き方

◎目次◎

教諭

はしがき	浄土門主 伊藤唯眞猊下	7
浄土宗宗務総長 川中光教		16

第1章 説論

法然上人における〈祈り〉について——新型コロナウイルス感染症を視座にいて——

大正大学教授 林田康順 21

第2章 法話・布教実例

法話	奈良教区 西迎院 中村晃和	72
----	---------------	----

布教実例

生きる意味	青森教区 西光寺 工藤大樹	94
-------	---------------	----

仏さまと共に	東京教区 善光寺 宮田恒順	100
--------	---------------	-----

無常の世だからこそ	静岡教区 大善寺 山田雅宣	106
-----------	---------------	-----

穏やかな日暮らしをく不安や恐怖に負けない心く

……京都教区 西遊寺 和田恵聞

112

となえ続けてわかること

……大阪教区 法藏院 荻安卓也

118

今日という日を心丈夫に

……福岡教区 無量寿院 三浦泰道

124

文書活用による布教例く保健医療従事者に贈る言葉く

……東京教区 浄心寺 佐藤雅彦

130

あとがき……布教専門部会部会長 佐藤雅彦

136

凡 例

典拠を示すにあたっては次の略号を用いる場合がある。書名のあとの数字は、巻数および頁数を示す。

○聖典……浄土宗聖典（浄土宗）

○昭法全……昭和新修法然上人全集（平楽寺書店）

○浄全……浄土宗全書（山喜房仏書林）

○御法語……『平成新版元祖大師御法語 前篇・後篇』（知恩院）

なお引用文は、原則として漢文は書き下し文に、旧字・旧仮名づかいは、新字・現代仮名づかいにあらためたほか、適宜ルビ等を付した。

教 諭

『無量寿經』下に「災厲不起」「兵戈無用」の語が見え、法然上人は『要義問答』の冒頭で「まことにこの身には、道心のなき事と病ばかりや嘆にて候らん」と求道者の身を案じられています。

このように災害・疫病は人間の四苦の一つを構成し、生死の一大事と関わっています。由来、仏教ではこの「疾疫災」に「刀兵災」と「飢饉災」を加えて、三災と称しています。またことに人の死はさまざまで、「大路・小路で斃れたり、大小便利の所で死ぬ人もあり、また太刀小刀で命を失い、火に焼かれ水に溺れて命を滅す類が多い」と語られています（『往生浄土用心』）。このようななかでも、人々が脅威と感じたのは感染性の高い疫病でした。だれかれ問わず、いつ襲うかも判らないからです。

『二百四十五箇条問答』に次のような問答があります。

一つ、厄病病みて死ぬる者、子生みて死ぬる者は罪と申し候はいかに。

答う。それも念仏申せば往生し候。

この質問者には、疫病や産で死亡した側に罪があるのだろうか。どうしようもなく死に至ったのに、それも罪悪なのかと糾す視点がありました。対する法然上人の答には、生死を離れるには念仏を申して往生を願うという宗教的視点の転換こそが必要だとの含意がありま

した。そしてその場には、悲しみに理解を受け、新しい氣付きを得て生き直そうとする苦惱者と、同時に温かい指導者が存在したのでした。

右の簡潔な問答のなかに、生死に流転する罪深いものが救われる道として「念仏往生」の道があることが示されています。これについては「このたび生死を離れる道、浄土に生まるにすぎたるはなし、浄土に生まる行ない、念仏に過ぎたるはなし」とは『浄土宗略抄』の冒頭に記された文章です。しかし念仏往生が可能なのは実に本願あつてのことですが、その所が、「我らが往生せん事念仏にあらずば叶い難く候なり。その故は念仏はこれ仏の本願なるが故に、願力に^{すが}縋りて往生する事は易し」と弥陀の本願につかまって、一筋に極樂を願ひ、一筋に念仏して、生死を離れるように勧められた「大胡太郎の妻室へ遣わす御返事」などが今に伝えられています。

このように、生死の迷いを離れて浄土に救われて行くためには、念仏こそがだれにでもできる最勝の道であると示されたのが、法然上人であります。『選択本願念仏集』（第十六章段）にて、

計れば、^{おもんみ}それ速やかに生死を離れむと欲せば、二種の勝法の中に、しばらく聖道門を闍いて、浄土門に選入すべし。浄土門に入らむと欲せば、正雜二行の中に、しばらくもろ

もろの雜行を抛てて、選じてまさに正行に歸すべし。正行を脩せむと欲せば、正助二業の中に、猶し助業を傍らにして、選じてまさに正定を専らにすべし。正定の業とは即ち是れ仏名を称するなり。み名を称すれば、必ず生ずることを得。仏の本願によるが故なり。

と明示されています。称名は弥陀の本願にかな適った正定の業なのです。それゆえ本願のままに称名すれば弥陀に救われて往くのは明白です。念仏往生こそ弥陀の本願そのものであったと受け取ることができるのです。

また法然上人の遺文に「正如房へ遣わす御文」がありますが、ここでも上人は正如房に対し、「仏の願力」をたの憑み、身の善惡にとらわれず、「一筋に念仏」してほしいと諭し、本願への信を強調しておられます。そして、『観經』を引いて「八十億劫」もの間生死を廻る罪をもつ者が十声一声の念仏で往生できるのは、これも「仏の本願の力」ならばこそだ、と仰信しなさい、仏説は空しくないから、と教えられるのでした。

ただ臨終の善知識については正如房を戒められています。もし導き手が「退縁の悪知識」であれば往生は果たせませんよ、必ず「仏を善知識に憑み」なさい、と。(きつと正如房の囲りには異学の聖道門の人が侍っていたのでしょ)

そして、今、私が別時で称えている念仏を悉く正如房の「往生の御助けになさんとこそ廻向」すると仰有り、おつしや「憑み思召さ」るようにと付言されています。師のこの言葉に接し、正如房は改めて師のいたわりの深さを感じ取り、今一度の見参が適わなかった寂しさを慰めたことでしょう。

実は正如房への返書のはじめには、人の命は誰れにも定めがなく、ただ遅れ先き立つ別れがあるだけで、亡骸に執なまするようない方になるよりも、一仏浄土の再会を果す方が、私たち信仰に生きる者の真実の在りようではないかという上人の心底が伝えられていたのです。この後で右に述べたような記述がつづくのです。勿論、正如房が上人を師と仰ぐ念仏者であるところご存知の上での事でした。

その上で上人は強調されます。阿弥陀が願を立て、釈迦が願を説き、諸仏も証誠され、弥陀化身の善導和尚が教えられた通り念仏申しておれば臨終には来迎して下さって、その慈悲加祐で心が乱れることは決してありませんので、どうか心弱くならないでほしい、と願っておられるのでした。

ところで正如房は正治三年に浄土へ旅立たれましたので、この御文が書かれたのは、『選択集』が成立した時とあまり離れていない頃と思われます。上人の六十歳代の後半に当りま

す。また前掲の『一百四十五箇条問答』にも建仁元年と注記された問答が含まれていますので、これも又この頃のものです。法然教団も関東に拡がっていた時期です。このような重要な時期から見え出すのが上人の病氣に関する記事です。よく風病や瘡おこりに罹りましたが、病の中で念仏をなさる上人の様子が窺えます。

その一つに津戸三郎宛の書状があります。「津戸返状（四月二十六日）」によると次の通りです。

この正月に別時念仏を五十日修しましたが、年来の風が積り、二月十日頃より口が乾くようになり、五十日までとは頑張っていました。が口の乾きが勝り水を飲むようになり、体も痛くなり、今日まで長引いておりますが御心配下さる程ではありません。医師が病いが重くなると申しますので灸を二度し、湿布もしました。また、いろいろな唐の薬を服したからか、ほんの少し良くなってきたようです。

このように病状を伝え、すぐにでも見舞に上京するという津戸に対して、どこに居ても念仏申して、互いに往生を期することが「めでたく永き計りごと」になるのではないかと仰っています。病中にあっても念仏のことが上人の念頭に絶えずあり、これが津戸への右のような言葉になったのでしょうか。

「めでたく永き計りごと」とは本願を憑んで念仏を称え、来迎を仰ぎて浄土へ往き生まれ、互いの再会を果たすという同法者間の契りでもあります。先述の正如房への上人の約束でもわかり、また「わが新生の蓮台を祈るべし」とのお言葉（『没後遺戒文』）とも連なっています。法然上人が求められた生死出離の道は、この「めでたく永き計りごと」として教化され、その教学理論が『選択集』撰述となったわけです。

ここで特記すべきは、『選択集』成立の建久九年より正治二年、建仁元年、同二年、建久九年、元久三年にかけて、上人の三昧発得があい次いだことです。『三昧発得記』には水想、地想、宝樹、宝池、宮殿の五観らの霊相や勢至菩薩、最後に弥陀三尊の現出が連記されていますが、なか程の建仁元年の項に「今において経ならびに釈に依りて往生疑いなし。地観の文に心に疑ひなきを得る故なり云々。思ふべし」といった文言が交っています。これは経釈や往生について絶対の信を表白されたものです。

この崇高な口称三昧中にも、上人は病に依って念仏を一万あるいは二万と減少しながらも相続され、元の七万遍に復されたのでした。上人の強靱な精神力と高揚される宗教的歓喜に、ただただ頭が下がるばかりであります。末徒たる我ら、不拔の信念を持って上人が得られた宗教体験に少しでも近づくよう精進しなければなりません。

令和四年一月一日

浄土門主
願譽唯眞

合
掌

はしがき

二年以上の長期に亘り世間はコロナウイルスの支配下にあります。報道はウイルスの感染被害の状況とその二次被害について多くの時間が割かれ、小さな話題は隅に追いやられてしまっています。政治も自ずからコロナ対策を第一の課題として一進一退を繰り返しているように見えます。人々の生活も大きな変容を強いられました。マスク着用やアルコール消毒といった新しい生活様式はすっかり定着し、外出を控えること、人との距離を取ることで、人が集まるところにはいかなことが当然とされています。コロナ禍はいったいいつまで続くのでしょうか。

コロナ禍の影響について飲食業界がクローズアップされていますが、我々寺院もコロナ禍の煽りを大きく受けていることは皆様も肌身で感じていることかと存じます。全国で法要が中止・延期・縮小されてこと数知れず、お寺と檀信徒を結ぶ行事が途絶えています。葬儀についても執り行われない、参列ができない、親戚に案内さえ無い、という葬送形態の変化もあります。これらは結果的に布教伝道の貴重な機会を喪失してしまっただけを意味しています。よくボディブローのようにと比喻されますが、数年の空白が

必ず五年、十年、二十年先に影響し、浄土宗のみならず日本仏教界全体に大きな影を落とすのでは無いかと危惧しております。

そもそもコロナ禍以前より核家族、無縁社会、少子高齢化、地方から都市部への人口流出など寺院を取り巻く環境には逆風が吹いております。コロナウィルスの蔓延によって都市部も地方部も海外も関係なく逆風の風速は高まっています。風に吹き流されるか、逆に風をかき分けて進むのか。

宗としてこの逆風を超えていくべく、寺院運営の面ではいくつかの施策を講じてまいりました。教師養成の面ではコロナ対応を万全にしつつ加行の伝灯を継続して参りましたが、残念ながら令和三年度の加行成満者数は大幅に減少しております。この逆境の中にあっても浄土宗の僧侶を志すという人物を私どもは求めております。そして布教伝道の面はまだまだこれから。まだこれからというのは、まだまだこれから新しい取り組みを試していける伸びしろが多いにあるということ、声を大にしてお伝えしたい。逆境だからこそ既存の伝統に縛られない新しい布教のスタイルを生み出すことが可能で、今までの檀家制度にとらわれず、新しい相手に対して法然上人のお念仏のみ教えを伝えることができると思います。

コロナ禍における限られた布教の機会に活用していただこうと、寺院と檀信徒をつな

ぐツールとして既存の浄土宗新聞を昨年四月より無償化したところ、それまで年々減少していた発行部数が一年間で前年比一・八倍まで回復し、一定の成果を挙げることができたと思えます。また浄土宗の公式YOUTUBEチャンネルを立ち上げ、総本山、大本山の各種法要の様子や浄土宗の作法といった動画コンテンツを一般の方に向けて配信するとともに、令和二年二月からは動画による布教伝道も開始、布教師諸上人のご協力のもと毎月更新して回数を重ね、各々二、七千回の再生回数をカウントしています。本原稿を執筆している二月現在の総カウント数は七万五九一八回。一カウントが一人への伝道とすると、のべ七万五九一八人の衆生に対して浄土宗の法話がなされているわけです。ですから、新たな試みとして一定の成果を挙げていると私は評価しております。

さらには各総本山、大本山や教区・開教地においても地域に応じた取り組みを進めていただいております。開宗八五〇年に向けて逆境をはねのけ、各地で機運が高まってくことを願っております。

どんな時代でも、どんな環境であっても浄土宗教義の根幹は揺るぐことはありません。八五〇年前の末法思想の真っ只中にあっても、現代のコロナ禍にあっても、衆生の生老病死をはじめとする種々の苦しみが消え失せることもなければ、阿弥陀仏の誓願が変わることも決してないのです。たまたま今日は機が病苦に偏っているだけにすぎないので

す。法然上人の『念仏往生義』には「常に念仏を称えて浄土往生に心向け、阿弥陀様のお迎えを強く願ひ、たとえ病に倒れて死が迫ろうとも、うろたえることなく往生を心待ちにすべき」とございます。自信をもつて我々は為すべきことを行つて参りましょう。

平成二十九年から昨年令和三年度にかけてこの『布教羅針盤』では浄土宗の根幹といえる「所求・所帰・去行」と「凡入報土」をテーマとして、令和六年の開宗八五〇年に向けて展開してまいりました。本年度は近年仏教界最大の危機であり社会構造の一大転換点になるであろうコロナ禍の状況を受けて、布教専門部会において協議を重ねていただいた結果、テーマを「疫禍における浄土宗のみ教えの説き方」と題し、発刊させていただきます。是非ご活用くださいますようお願い申し上げます。

合 掌

令和四年四月

浄土宗宗務総長 川中光教

◎
第1章
◎

説

諭

法然上人における〈祈り〉について

―新型コロナウイルス感染症を視座にいれて―

大正大学教授 林田 康順

【一】はじめに―コロナ禍による世界の変容と宗教者・仏教者への期待―

〈一〉コロナ禍による世界の変容

二〇二一年一二月三〇日時点、新型コロナウイルスの世界での感染症数と死者数の累計は次の通りです。⁽¹⁾

累計感染者数	二億八一八〇万八二七〇人
累計死亡者数	五四一万一七五九人

世界中で、二億八千万人以上の方々が感染し、五百四十万人以上の方々が死亡された新型コロナウイルス。今もその数は増え続け、パンデミックの収束は見えていません。まづもっ

て、亡くなられた多くの方々のご冥福を祈り、そのご家族・ご親族、関係する方々へお悔やみを申し上げると共に、今も治療に取り組み、後遺症に悩まれておられる方々にお見舞い申し上げます。また、医療従事者やエッセンシャルワーカーをはじめとする感染症の治療や対策にご尽力いただいている方々に深く感謝申し上げます。

大都市のロックダウン、学校の一斉休暇……。マスクの着用、テレワークやオンライン授業の常態化……。新型コロナウイルスの感染拡大によって、私たちの日常は大きく変容しました。親しい人との会食を満足に出来ないもどかしさ、故郷に帰省して家族や親戚と親しく会話を交わすこともできない寂しさ、入院や入所している大切な身内にさえ画面越しでしか会えないやるせないさ……。そして、新型コロナウイルスによってお亡くなりになられた方のご遺体は非透過性納体袋に納められますので、その葬儀において、頬に手をあて、直接声をかけることもできないままの状態で儀式が進んでいくといえます。さらに、新型コロナウイルスの感染によって、引越しを余儀なくされるなど、差別を受けたという報道もあります。新型コロナウイルスは人と人との大切なつながりを根本から壊そうとしているかのようです。

〈2〉宗教者・仏教者への期待

各種研究機関によってコロナ禍による影響や被害の分析が相次ぐ中、公益財団法人全日本仏教会と大和証券による共同調査「仏教に関する実態把握調査（二〇二〇年度 臨時調査）報告書」新型コロナウイルス感染症が仏教寺院に与える影響」（六一九二サンプル）が実施・公開されています。その中、次のような項目と回答があります。^②

7―① 今後、寺院・僧侶に求める役割

Q 29 コロナ禍において寺院・僧侶はどのような役割を担うべきか？

不安な人たちに寄り添う

三二・ 一%

コロナ禍収束を祈る

二一・ 九%

しっかりお葬式を執り行うことを心掛ける

一八・ 一%

悩み相談などの傾聴を行う

一七・ 五%

生活に困っている方たちの支援を行う

一七・ 一%（中略）

特に担うべき役割は無い

三五・ 三%

こうしたアンケート結果を受けて、次のような分析が施されています。^③

・「菩提寺の有無」や「仏教への関心の有無」に関わらず、コロナ禍において僧侶への

期待は高く表れている。

・通常の調査では「特になし（無関心）」の項目が高く表れることが多いが、本設問においては「特になし」の回答比率が3割台と低く表れている。

・今回のコロナ禍においては「寄り添う」「祈る」が強く表れていることが特徴的であり、それだけ寺院・僧侶に対しての期待は大きいと考えられる。

このように一般の方々から寺院・僧侶に対しての期待が大きいと指摘されているのは実にありがたいことです。その一方、全回答の中、「特に担うべき役割は無い」の回答率が三五・三%ともっとも高く、仏教者は大いに反省しなければいけないことにも留意すべきです。しかし、だからこそ寺院や僧侶に期待されている「寄り添い」や「祈り」に対して、私たち僧侶は、それぞれの宗派の教えに基づいて、しっかりと対応する必要があるでしょう。

現在、寺院や神社をはじめ、多くの宗教施設において疫病退散の祈りが日夜捧げられ、あるいは、新型コロナウイルスによってお亡くなりになられた方々の葬儀が勤められています。そうした中、本稿では、新型コロナウイルス感染症を視座に置いて、法然上人が現当二世の「祈り」をいかに捉えておられたのかを中心に考察を巡らせて、浄土宗僧侶の布教伝道の一助となることを目指したいと思います。

【二】法然上人が提示する時代観・世界観の再確認

法然上人による現当二世の「祈り」について考察を巡らせるにあたり、まずもって上人ご存命当時の世相、及び、上人が提示する時代観・世界観について整理を施しておきたいと思ひます。

（一）法然上人ご存命当時の世相について

法然上人は、その主著『選択集』第一章段の冒頭に道綽禪師『安樂集』から次の一節を引用されます。

『安樂集』の上に云く、問うて曰く、一切衆生は皆仏性有り。遠劫より以来まさに多
仏に値えるなるべし。何に因つてか今に至るまで、なお自ら生死に輪廻して、火宅を出
でざるや。答えて曰く、大乘の聖教に依るに、良に二種の勝法を得て、以て生死を排は
ざるに由る。ここを以て火宅を出でざるなり。何をか二と為す。一には謂く聖道、二に
は謂く往生浄土なり。その聖道の一種は、今の時証し難し。一には大聖を去ること遙遠

なるに由る。二には理は深く解は微なるに由る。この故に『大集月藏經』に云く、「我が末法の時の中に、億億の衆生、行を起こし道を修せんに、いまだ一人も得るもの有らじ」。当今は末法、現にこれ五濁惡世なり。ただ浄土の一門のみ有つて通入すべき路なり。⁽⁴⁾

ここで道綽禪師は、釈尊在世から時を遠く隔て、五濁に満ちた末法の世において、教える理解する能力の劣った現今の衆生は、浄土門によらなければ解脱を得ることは到底不可能であると述懐しています。北周の武帝による激しい廢仏の嵐を目の当たりにした道綽禪師にとって、眼前の世はまさに末法に他ならなかったのです。

わが国における入末法の年は永承七^{えいしやう}(一一〇五二)年であり、そのおよそ八〇年後、法然上人は生誕されました。それでは、法然上人ご存命の八〇年間は、いかなる世相だったのでしょうか。その主な災厄を抽出してみると次のようになります。⁽⁵⁾

長承三年(一一三四) 風害・水害・飢饉・咳病流行などが起こる(中右記)

保延四年(一一三八) 京都大火(百練抄)

康治二年（一一四二）大雨で鴨川氾濫（本朝世紀）

久安二年（一一四六）京都大火（本朝世紀）

久安三年（一一四七）旱魃により、神楽苑の池を掃除させる（本朝世紀）

久安四年（一一四八）京都大火（台記）

久安五年（一一四九）高野山大塔・金堂・灌頂堂など、落雷により焼亡（本朝世紀）

仁平元年（一一五一）飢饉のため、伊勢など九社に奉幣（本朝世紀）

大風雨で宇治橋流出（本朝世紀）

仁平三年（一一五三）大風雨により新造中の土御門内裏内殿などが倒壊（台記）

久寿二年（一一五五）諸国飢饉（百練抄）

保元元年（一一五六）保元の乱

平治元年（一一五九）平治の乱

永暦二年（一一六一）大雨で鴨川が氾濫（山槐記）

仁安元年（一一六五）京都大火、千余宇焼亡（安部泰親朝臣記）

仁安三年（一一六八）京都大火、人家三千余宇焼亡（百練抄）

嘉応元年（一一六九）旱天のため、たびたび祈雨を行う（兵範記）

承安元年（一一七一） 羊病と称す病が流行（百練抄）

承安五年（一一七五） 長雨により諸国の作物に被害が出る（玉葉）

大雨で京中洛外の家屋破損（玉葉）

安元三年（一一七七） 疱瘡流行（百練抄） 京都大火、大極殿・朝堂院など左京城の三分の一を焼亡、死者数千人（安元の大火）（玉葉） 京中に強盗

が横行（玉葉）

治承四年（一一八〇） 平重衡、南都を攻め東大寺・興福寺などを焼き払う（山槐記）

治承五年（一一八一） 京中道路に餓死者が満ちあふれる（吉記）

諸国飢饉（百練抄）

寿永元年（一一八二） 飢饉のため数万人が死亡（方丈記） 貧者が、京中の人屋を壊し

て、薪などにして売却することを禁じる（百練抄）

元暦元年（一一八四） 京中に強盗横行（山槐記）

文治元年（一一八五） 義経、長門国壇の浦で平家軍を破る、平家滅亡、安徳天皇入水

（吾妻鏡） 京都で疫病流行（玉葉） 京都大地震（玉葉）

建久二年（一一九二） 鎌倉で大火、幕府・鎌倉八幡宮等炎上（吾妻鏡）

承元二年（一二〇八） 京都大火（猪隈関白記）

ここに示したのは、疫病や風水害などごく一部の大きな天災や大火であって、寺社の火災など中小の被害は枚挙に暇がありません。また、延暦寺・園城寺・清水寺・祇園社・興福寺・東大寺・高野山・熊野・伊勢神宮・金峯山寺といった大寺社の僧兵などが引き起こした騒擾そうじょうに至っては、その数の多さと惨状に目を覆いたくなるばかりです。

実際、法然上人がご存命だった八〇年間、その元号は次のように移り変わっています。

長承―保延―永治―康治―天養―久安―仁平―久寿―保元―平治―永暦―応保―長寛―
永万―仁安―嘉応―承安―安元―治承―養和―寿永―元暦―文治―建久―正治―建仁―
元久―建永―承元―建暦。

その数はなんと三〇にもなり、平均すると二年から三年で元号が変わっていたことになりました。当時は、風水害や疫病、戦乱などを経て、よりよい時代を迎えようとして元号が変えられました。『一百四十五箇條問答』において法然上人も、次のような問答を交わされており、京洛に疫病が広まり、多くの人が亡くなられていた状況がうかがえます。

厄病病みて死ぬる者、子生みて死ぬる者は、罪と申し候はいかに。答う。それも念仏申せば往生し候。⁽⁶⁾

(はやり病にかかつて死んだ人や、出産がもとで死んだ人は罪を背負う、というのとはどのように受け止めればよろしいでしょうか。お答えします。そのように亡くなられたとしても、お念仏をとなえれば往生は叶うのです。)

法然上人ご存命の時代が、いかに激動の世であり、まさに末法の様相を呈していたことが知られます。

〈2〉法然上人が提示する時代観——当今は末法、現にこれ五濁惡世なり——

こうした世相を踏まえて法然上人は、『禪勝房に示されける御詞』や『信空上人伝説の詞(其一)』において次のように述べられます。

末法の中には、持戒も無く、破戒も無し、但名字の比丘のみ有りと、伝教大師の末法灯明記に委しく此の旨を明かす。其の上は持戒破戒の沙汰すべからず、此くの如き凡夫

の為に発す所の本願なれば、急ぎ急ぎ名字を称うべきなり。⁽⁷⁾

（伝教大師最澄の『末法灯明記』には「末法の時代においては、戒律を守るといふことも破るということも、共にあり得ない。ただ名前だけの僧がいる」と詳細に示されています。そうである以上、「戒律を守る、守れない」といった議論などするべきではありません。「私たちのような凡夫の往生を叶えるためにお誓いになった阿弥陀仏の本願である」と心得、速やかに名号をとなえるべきです」と。）

僧の作法は大小の戒律あり。しかりといえども末法の僧これにしたがわず、源空これを読みしむれども、たれの人かこれにしたごうべき。ただ詮ずるところは念仏の相続するようにあいはかろうべし。⁽⁸⁾

（僧侶の守るべき決まりは大乗・小乗の戒律によります。しかしながら、この末法の時代の僧にはそれが守りきれません。たとえ私、源空が「戒律を守りなさい」と誠めたところで、いったい誰が従うことができるでしょうか。要はただ、お念仏が相続できるように心がけるべきでしょう。）

これらのご法語において法然上人は、末法においては戒律を遵守できる僧などいないことを明言されています。そうした事態は、当時、戒律などの厳守によって獲得されと考えられていた宗教的な力である〈験〉に基づいて務められる疫病退散などの効果がおぼつかないということの裏返しでもあります。

さらに法然上人は、『念仏往生要義抄』において次のように述べられています。

世すでに末法になり、人みな悪人なり。はやく修しがたき教を学せんよりは行じやすき弥陀の名号をとなくて、このたび生死の家をいずべきなり。⁽⁹⁾

(この世はすでに末法となり、人々は悪行を犯さざるを得なくなっています。そうであればこそ、修めがたい聖道門の教えを学ぼうとするより、修めやすいお念仏をすぐにもとなえ、今生こそは生死を繰り返すこの迷いの家から出ていくべきなのです。)

ここで法然上人は、末法においては、戒律を遵守することはおろか、すべての者は悪人にならず、だからこそ、修め易いお念仏を相続すべきことを訴えておられるのです。

二一世紀を迎えた現代において、こうした末法の様相がなくなつたわけではありません。

世界を覆うコロナ禍は言うまでもなく、わが国においても悲惨な事件や事故、自然災害が後を絶たず、さらに世界を見渡せば戦乱は引きも切らず、異常気象は留まるところを知りません。法然上人が引用された「当今は末法、現にこれ五濁悪世なり。ただ浄土の一門のみ有つて通入すべき路なり」という時代観は、今もそのままあてはまるのです。

〈3〉法然上人が提示する世界観——「浄土三部経」が開示する相対的・二元論——

こうした時代観に基づいて法然上人は、「浄土三部経」が開示する世界観を背景にして浄土宗の教えを構築されました。すなわち、法然上人が帰依し、求められたのは、酬因感果の報身・阿弥陀仏であり、指方立相の報土・西方極楽浄土です。そして、例外なく私たちは、はるか無始の彼方から三界に流転し続け、自身の力ではそこから出離する術を持ち得ない凡夫であり（九品皆凡）、この世界は、まぎれもなく娑婆であり穢土に他なりません。つまり法然上人は、広く聖道門が説く煩惱即菩提・生死即涅槃・娑婆即浄土などといった絶対的・一元論の世界観を知悉ちしつしつつも、その世界観の俎上そじょうに教義を構築することをせず、仏と凡夫、浄土と娑婆の隔絶という相対的・二元論の世界観に足場を置いて教えを構築されたのです。

これまで多くの先学により、法然上人における現当二世の「祈り」についての考察が施さ

れてきました。しかし、その多くが、仏教という大枠のもと、すべての宗派があたかも同じ世界観を共有しているかのごとき前提のもとになされてきました。そうした前提のもとでは、次章以下に整理を施す法然上人における「祈り」の捉え方は不徹底の謗りを招くことになりかねません。

そもそも法身の世界を背景とする絶対的・一元論の立場に基づけば、わが身を取り巻くあらゆる縁や事象は、そのまま、あるいは、「祈り」を通じることによって尊い仏の働きとして位置づけられます。こうした当時の仏教界の状況を踏まえた上で法然上人は、実存的存在としての私たち一人ひとりと個別具体的に相対関係（三業相応）を結んでくださる阿弥陀仏に救いを求め、来世での浄土往生を目指されたのです。

このように現世を厭うべき穢土と捉える法然上人の教えに基づく以上、「祈り」によってもたらされる現世の利益も完全であらうはずがありません。もし、それが完全にもたらされずとするならば、現世を厭う必要など毛頭ありませんし、それを理論的に徹底してしまえば、娑婆即浄土の絶対的・一元論の世界に逆戻りしてしまう結果を招きかねないこととなるでしょう。阿弥陀仏は、そんな娑婆世界に生き、自身の力では救われ難い私たち凡夫を哀れんで五劫思惟されて四十八願を建立され、兆載永劫の修行の結果、成仏され、今まさに私たち一人

ひとりに救いの手を差し伸べられ、わが極楽浄土に迎えようと私たちがとなえるお念仏の声に耳を澄ませて聞いてくださっているのです。

【三】 本願念仏と祈り

これまでの整理を踏まえて、以下、法然上人による現当二世の「祈り」について考察を巡らせたいと思います。まずは、疫病退散など、現世の「祈り」の捉え方です。

〈一〉 現世の祈りの種々相

当時、広く修されていた現世の祈りをめぐって法然上人はいかなる立場をとっていたのでしょうか。『百四十五箇條問答』において法然上人は次のような問答を遺されています。

現世をいのり候に、しるしの候わぬ人はいかに候ぞ。答う。現世をいのるに、しるしなしと申す事、仏の御そらごとには候わず、わが心の説のごとくせぬによりて、しるしなき事は候なり。さればよくするにはみなしるしは候なり。観音を念ずるにも、一心に

すればしるし候。もし一心なければしるし候わず。むかしの縁あつき人は、定業すらなお転ず、むかしもいまも縁あさき人は、ちりばかりものくるしみにだにもしるしなしと申して候なり。仏をうらみおぼしめすべからず。ただこの世、のちの世のために仏につかえんには、心をいたし、ま事をはげむ事、この世もおもう事かない、のちの世も浄土にうまると候なり。しるしなくば、わが心はずべし。⁽¹⁰⁾

(この世を豊かに暮らせるように祈ったにもかかわらず、その御利益がいただけない人がいますが、なぜでしょうか。お答えします。そうした祈りに御利益がないとのことですが、御仏が嘘を言っているわけではありません。自分の心が御仏の教えに沿わないから御利益がないのです。したがって、教えの通りにすれば御利益はあるものです。観音菩薩を祈るにも、一心に念ずれば御利益はあり、そうでなければありません。前世から深く仏縁を結んだ人は、この世での逃れ難い苦難さえ変えることが出来ます。昔も今も仏縁の浅い人は、少しばかりの苦難が巡ってきただけで「御仏の御利益がない……」と言いがちです。御利益とはこうしたものですから御仏を恨みに思ったりしてはいけません。ただ現世のため、また後世のために御仏にお仕えするには、心の底から、誠の思いで励んでこそ、現世での願いも叶い、また後世には浄土に往生することができるので

す。御利益がないというならば、自分の心を恥すべきでしょう。

このように法然上人は現世の祈りに対して、実に寛容な姿勢を示されていたことが分かります。冒頭に述べたように、今も、さまざまな宗教において新型コロナウイルスをはじめとする疫病退散の祈りが繰り広げられていることに對して、法然上人はこうした寛容な姿勢を示されることでしょう。

また法然上人は、『津戸の三郎へつかはす御返事』や『鎌倉の二位の禅尼へ進ずる御返事』において次のようにも述べられています。

この世のいのりに、仏にも神にも申さん事は、そもくるしみ候まじ。後世の往生、念仏のほかにあらぬ行をすること、念仏をさまたぐれば、あしき事にて候え。この世のためにする事は、往生のためにては候わねば、仏神のいのり、さらにくるしかるまじく候なり。⁽¹¹⁾

(この世をよりよく過ごせるように神仏に祈ることは、差し支えありません。けれども後生の往生を目指して、お念仏以外の行を修することは、お念仏を妨げますから、よ

ろしいことではありません。この世での御利益のために祈ることは往生のためではありませんので、神仏に祈りを捧げても格別不都合なことではありません。

この世の祈りに、念仏の心をしらずして、仏神にも申し、経をもかき、堂をもつくらんと（中略）せめてはまた後世のために、つかまつらばこそ候わめ。その用事なしと仰せ候べからず。専修をさえぬ行にてもあらざりけりとも、思しめし候べし。⁽¹²⁾

（お念仏をとなえず、その意義も知らないままに、この世をよりよく過ごせるように神仏に祈念し、写経をし、お堂を造ろうとすることは、（中略）少なくとも後の世の極楽への願いを発すきっかけになるならば、それも結構なことでしょう。「その必要はない」などとおっしゃってはいけません。「専らお念仏をとなえることの妨げになるほどではないものの、やりようによつては妨げになるかも知れない」とお思いになつてください。）

このように法然上人は、神仏へ向けた現世の祈りを一概には否定しないものの、その祈りが後世のためのお念仏を妨げてはならない、と戒めていることが分かります。

〈2〉お念仏と祈り

(1) 現世の祈り―お念仏と諸行―

次に法然上人がお念仏と現世の祈りについていかなる言及をされているかをみてみます。

かならず専修の念仏は、現当のいのりとなり候なり。⁽¹³⁾

(専らお念仏をとなえることは、必ず今生にも後生にも通じる祈りになるものです。)

末代⁽¹⁴⁾の衆生は、今生の祈りにもなり、まして後生の往生は念仏のほかには叶うまじく候。⁽¹⁴⁾

(末法の時代の衆生にとって、お念仏をとなえることはこの世を幸せに生き抜く祈りともなり、まして後生の往生はお念仏の他では叶うことはないのです。)

有智無智・善人悪人・持戒破戒・貴賤・男女もへだてず、もしは仏の在世の衆生、もしは仏の滅後の衆生、もしは釈迦末法万年ののちに、三宝みなうせての後の衆生まで、

ただ念仏ばかりこそ、現当の祈祷とはなり候え。⁽¹⁵⁾

（智慧のある人も智慧のない人も、善人も悪人も、戒を守る人も戒を守れない人も、身分の高い人も低い人も、男性も女性も、お釈迦さまがいらっしゃった時代の人々も、入滅された後の人々も、さらには末法の時代が過ぎて仏法僧の三宝がみな滅んでしまうであろう時代の人々までも、そうしたすべての人々にわたって、ただお念仏一行のみが、現世を幸せに過ごし、来世にも極楽往生を遂げるための祈りになるのです。）

現世後世の御つとめ、なに事かこれ（念仏）にすぎ候べきや。⁽¹⁶⁾

（現世・後世の安樂を願う勤めとして、お念仏に勝るものが他にありませんか。）

このように法然上人は、お念仏は現当二世に通じる唯一の祈りであり、かつ、お念仏に勝る現世・後世の祈りは存在せず、その功德は法滅の世まで永続することを明言されています。こうした法然上人によるご指摘は、現代の新型コロナウイルスをはじめとする疫病退散を願う「祈り」についてもそのままではまることでしょう。

(2) お念仏によってもたらされる現世利益の種々相

ちなみに法然上人は、お念仏によってもたらされる現世利益の種々相について、次のような法語を遺されています。

善導の往生礼讃に問うていわく、阿弥陀仏を称念礼観するに、現世にいかなる功德利益がある。こたえていわく、阿弥陀仏となる事一声すれば、すなわち八十億劫の重罪を除滅す。⁽¹⁷⁾

(善導大師の『往生礼讃』に「問う。阿弥陀仏の名号を称え、阿弥陀仏を礼拝し、その姿を想い留めたならば、現世にいかなる功德や利益があるのだろうか。答える。阿弥陀仏の名号を一声するだけで、この後、八十億劫という永い歲月、迷いの世界を巡らねばならないほどの重い罪の報いが除かれ滅せられるのである」と述べられています。)

専ら弥陀の名を念ずる者は、即ち観音勢至、常随影護したまい、亦、親友知識の如くなることを。(中略)念仏は此くの如き等の現当三世始終の両益有り。⁽¹⁸⁾

(専ら阿弥陀仏の名号をとる者は、すなわち観音・勢至両菩薩が影の形に沿うよ

うように常にそばでお守りになり、また親友や善知識のようになって下さるのです。

(中略) お念仏はこのように現世にも後世にも利益をもたらせてくださるのです。)

仏と聖衆と常に来りて護念し給うことを蒙る。既に護念を蒙れば、即ち延年転寿を得⁽¹⁹⁾。
(阿弥陀仏や極楽の聖衆が常に念仏行者のもとにいらっしゃって守り念じてくださる。
このように守り念じてくださるので、寿命を長らせることができます。)

このように法然上人は、罪障滅尽・随逐影護・延年転寿などの現世利益がお念仏の相続によってもたらされることを明らかにされているのです。

(3) お念仏による現世利益の背景

『要義問答』において法然上人は、こうしたお念仏による現世利益がもたらされる背景を述べてられています。

念仏の行者は、身をば罪惡生死の凡夫とおもえば、自力をたのむ事なくして、ただ弥

陀の願力にのりて往生せんとねがうに、魔縁たよりをうる事なし。観慧をこらす人にも、なお九境の魔事ありという。弥陀の一事には、もとより魔事なし、観人清浄なるがゆえにといえり。仏をたぶろかす魔縁なければ、念仏のものをばさまたぐべからず、他力をたのむによるがゆえに、百丈の石をふねにおきつれば、万里の大海をすぐというがごとし。または念仏の行者のまえには、弥陀観音つねにきたりたもう。二十五の菩薩、百重千重護念したもうに、たよりをうべからず。⁽²⁰⁾

（お念仏の行者は、自らを「悪業を重ねて罪深く、迷いの世界をさまよい続ける凡夫である」と省みているので、自分の能力をたよりにすることなく、ただ阿弥陀仏の本願の力にその身を委ねて往生しようと願うようになるものです。ですから、魔縁が忍び寄る余地はありません。心を静めて仏の智慧を体得しようとする人でさえ、仏の世界に至らぬ限りは、なお九境の魔事があるといえます。阿弥陀仏の救いの働きという一事には、そもそも魔事などありません。なぜなら、本願を成就された阿弥陀仏が清らかであるからです。阿弥陀仏をたぶらかすような魔縁などありませんから、お念仏をとる人をお妨げすることなどあり得ないのです。阿弥陀仏の本願という他力をたよりますから、浄土往生が叶うのは、たとえば百丈もあるような巨大な石でも、船に乗せれば果てしな

い大海を渡り切ることができるようなものです。また、お念仏の行者の眼の前には、阿弥陀仏や観音菩薩が常においでになり、二十五人の菩薩が百重にも千重にも行者を守ってくださるので、魔縁が忍び込んでくる余地などないのです。）

このように法然上人は、阿弥陀仏や観音・勢至両菩薩をはじめ、多くの極楽の聖衆が自力の思いを捨てた念仏行者を幾重にも取り囲んで護念してくださるので、魔縁がつける隙などない、と念仏行者にもたらされる現世利益の背景について明らかにしておられます。阿弥陀仏の廣大無辺な慈悲の御心に深い感謝の思いが、なお一層募ります。

【四】現世の祈りと後世の祈り

（一）お念仏による現世の祈りの限界

このように法然上人は、お念仏に勝る現世を祈る手だてなどなく、それによってもたらされる利益には、阿弥陀仏自身の本願力が働き、極楽の聖衆が幾重にも護念されるので廣大無辺にして甚深であると捉えておられたことが分かります。

そうした広大な利益にあずかる念仏行者ではありませんが、前述したように法然上人は、以下のような限界があることも述べられています。

弥陀の本願を深く信じて、念仏して往生を願う人をば、弥陀仏より始め奉りて、十方の諸仏菩薩、観音勢至、無数の菩薩、この人を圍繞して、行住坐臥、夜昼をもきらはず、影のごとくにそいて、もろもろの横悩をなす、惡鬼惡神のたよりをはい除き給いて、現世にはよこさなるわづらいなく安穩にして、命終の時は極樂世界へ迎え給う也。されば念仏を信じて往生を願う人、ことさらに惡魔をはらわんために、よろづの仏神に祈りをもし、つつしみをもする事は、なじかはあるべき。いわんや仏に歸し、法に歸し、僧に歸する人には、一切の神王、恆沙の鬼神を眷属として、常にこの人をまもり給うといえり。しかればかくのごときの諸仏諸神、圍繞してまもり給わん上は、又いづれの仏神かありてなやまし、さまたぐる事あらん。又宿業かぎりありて、うくべからん病は、いかなるもろもろの仏神に祈るとも、それによるまじき事也。祈るによりて病もやみ、命ものぶる事あらば、誰かは一人として病み死ぬる人あらん。いわんや又仏の御ちからは、念仏を信ずるものをば、転重輕受といいて、宿業かぎりありて、おもくうくべき病

を軽く受けさせ給う。いわんや非業をはらい給わん事ましまさざらんや。されば念仏を信ずる人は、たといかなる病を受くれども、みなこれ宿業也。これよりも重くこそ受くべきに、仏の御ちからにて、これほども受くるなりとこそは申す事なれ。われらが悪業深重なるを減して極楽に往生する程の大事をすらとげさせ給う。ましてこの世にいかほどならぬ命をのべ、病をたすくるちからましまさざらんやと申す事也。されば後生をいのり、本願をたのむ心も薄き人は、かくのごとく圍繞にも護念にもあづかる事なしとこそ善導はの給ひたれ。同じく念仏すとも、ふかく信をおこして、穢土をいとい極楽を願うべき事也。かまえて心をとどめて、このことわりをおもいほどきて、一向に信心をいたして、つとめさせ給うべき也。⁽²¹⁾

(阿弥陀仏の本願を深く信じてお念仏をとなえて往生を願う人に対しては、阿弥陀仏をはじめとして、あらゆる世界の御仏、観音菩薩や勢至菩薩など無数の菩薩が、その人を取り囲み、歩いている時も、留まっている時も、座っている時も、横になっている時も、昼も夜も嫌うことなく、影がわが身に添うようにお守りになり、さまざま災いをもたらす悪鬼や悪神がつけている手がかりを払い除いてくださるので、現世においては道理を外れた煩いがなく穏やかで安らいだ心持ちとなり、命終の時には極楽浄土に迎えて

くださいます。ですから、お念仏の教えを信じて往生を願う人は、わざわざ天魔波旬をはじめとする邪な悪神たちによる災いを払い除くために、多くの仏や神に祈りを捧げたり、畏怖の心を向けたりする必要がどうしてあるものでしょうか。ましてや、仏に帰依し、法に帰依し、僧に帰依する人には、仏教を守護するあらゆる善神たちがはかりしれない数の鬼神たちを従えて、常にこの人を守られると言われています。このように諸仏や神々が、念仏者を取り巻いてお守り下さるのですから、なおさら、他のいかなる仏や神が念仏者を悩ましたり、妨げたりすることがありましようか。また、遠い過去からの因縁によって受けなければならぬ病は、いかなる仏や神に祈りを捧げたとしてもそれで治るはずありません。祈りによって病が治ったり、寿命が延びたりすることがあるならば、どうしても病になったり死んでしまう人がいるのでしょうか。ましてや、御仏の力は、お念仏の教えを信じる者に対しては、転重軽受といって、遠い過去からの因縁によって重く受けなければならない病を軽く受けさせてくださるのです。ましてや、遠い過去からの因縁によらない災いを払われないことなどありません。ましてや、お念仏の教えを信じる人は、たとえどのような病を患ったとしても、みな遠い過去からの因縁であり、本来であれば、これよりも重く受けなくてはならない病を御仏の力によって

この程度に受けているのだと申し上げているのです。阿弥陀仏は、私たちの深く重い悪業の働きを滅して、極楽浄土に往生させる程の大事ですら成し遂げてくださるのです。ましてや、この世の限りある寿命を延ばし、病を癒やす力がないことなどありませんか、と申し上げているのです。そして、「後生を祈り阿弥陀仏の本願を頼りとする心の乏しい人は、仏や神に取り囲まれたり、お守りいただいたりする功德に預からない」と善導大師は述べられています。同じようにお念仏をとるにしても、より深く阿弥陀仏の本願を信じる心を発して、穢土を厭い極楽を欣うべきなのです。よくよく心に留めて、こうした道理を理解して、ひたすら信心の限りを尽くしてお念仏に精進するべきです。）

ここで法然上人は、現世での祈りの限界を素直に認めておられます。もちろん、お念仏も例外ではありません。

こうした法然上人のご説示は現代にも通じていると考えられます。なぜなら、加持祈禱を受けるにしても、お札やお守りを身につけるにしても、仮にその方が事故に巻き込まれ、病気を患ったとすれば、「あの時、靈驗あらたかなお寺で加持祈禱を受けたから、あるいは、

由緒正しい神社でお札やお守りを求めたから、この程度で済んだのだ」という思いを意識するとせざるにかかわらず導き出していることが多いと推測されるからです。

なるほど法然上人が明確に主張されているように、無病息災や不老長寿などの祈りが一〇〇%叶えられるはずありません。九歳で父漆間時国公の非業の死に遭遇し、一三歳で母秦氏との生涯の別れを経験し、嵯峨清涼寺の生身釈迦の前で涙する多くの方々の悲しみや憤りを目の当たりにされた法然上人にとって、煩惱即菩提・生死即涅槃・娑婆即浄土といった絶対的一元論の教義のもとで、この世界を説明しようとする目前の仏教は「すべての人々の心に寄り添う教えではない」と映ったことでしょう。法然上人は、多くの人々が遭遇している、いかんともしがたい現実の厳しさから目を逸らすことはありませんでした。人々の悲しみから距離を隔て、一人高みに立って「それでもこの娑婆は浄土なのだ」と主張することをされませんでした。周囲の人々の視線にわが視線を同じくして、共に悲しみ、共に泣く立場を選び、「この穢土を離れ、極楽浄土への往生を求めて阿弥陀仏の救いにこの身を委ねるように」と訴えられたのです。

〔2〕現世と後世の位置づけ―大事の後世―

さらに法然上人は、現世と後世の位置づけについて『念仏往生義』において次のように述べられます。

いたずらに仏神に祈らんよりも、一すじに弥陀をたのみてふた心なければ、不定業をば弥陀も転じ給えり、決定業をば来迎し給うべし。無益のこの世を祈らんとて大事の後世を忘るる事は、さらに本意にあらず、後世のために念仏を正定の業とすれば、これをさしおきて余の行を修すべきにあらずれば、一向専念なれとは勧むるなり。²²⁾

（むやみやたらと仏神に祈るよりも、いちずに阿弥陀仏にすがりして心に裏表がなければ、阿弥陀仏は往生のためとはならない行をも往生の行へと転じてくださり、必ず浄土往生が叶うお念仏を修める人を自ら来迎してくださるのです。はかないこの世での利益を祈り、何よりも大事な後生のことを忘れてしまうのは、決して本意ではありません。阿弥陀仏は、後生のためにお念仏を正しく往生が定まった行とされたのですから、それをさしおいて他の行を修めるべきではありません。だからこそ、ひたすらお念仏をとえなさいとお勧めしているのです。）

ここで法然上人は、そもそも浄土往生という「後世」こそ「大事」であって、それに比べれば、ただか数十年という「この世」は「無益」なものであると述べられています。こうしたご法語を通じて法然上人は、「この世」の利益に向けた人々の祈りがすべて叶えられるはずもないことを暗に示そうとしているかのようです。

〈3〉命終に臨んで―阿弥陀仏の来迎にあずかつて―

私たちが死を迎える状況について法然上人は次のように述べられています。

先徳たちのおしえにも、臨終の時に、阿弥陀仏を西のかべに安置しまいらせて、病者そのまゑに西むきに臥して、善知識に念仏をすすめられよとこそ候え。それこそあらまほしき事にて候え。ただし人の死の縁は、かねておもうにもかない候わず、にわかには大路みちにて、終る事も候。又大小便利のところにて死ぬる人も候。前業のがれがたくて、太刀かたなにていのちをうしない、火にやけ、水におぼれて、いのちをほろぼす類おおく候えば、さようにて死に候とも、日ごろの念仏申して極楽へまいる心だにも候人なら

ば、息のたえん時に、阿弥陀・観音・勢至、来たりむかえ給うべしと信じおぼしめすべきにて候なり。⁽²³⁾

（源信はじめ高僧方の教えにも、臨終の時には阿弥陀仏の仏像や仏画を部屋の西側の壁に御安置して、その前に病人の頭を北向きに、顔を西向きにして寝かせ、お念仏をとなえるように善知識から勧めてもらいなさい、と説かれています。確かにこれは理想的なことといえます。しかし、人が死ぬ時のことなど、日頃の考え通りにいくものではありません。往来で突然倒れて死んでしまうこともあれば、お手洗いで用を足している最中に死んでしまうこともあります。前世の行いによる報いは避けがたく、刀などで斬られて命を失うこともあれば、火事のために、あるいは水に溺れて命を落とす人も多くいます。しかし、たとえそういう死に方しても、日頃からお念仏をとなえ、極楽へ往生したいという心さえ持っている人ならば、今まさに息が絶えようとしている時に、阿弥陀仏は観音菩薩や勢至菩薩と共に迎えに来てくださると信じて思い定めるべきです。）

本願信じて往生ねがい候わん行者も、この苦はのがれずとて、悶絶し候とも、息のたえん時は、阿弥陀ほとけの力にて、正念になりて往生をし候べし。臨終は髪筋きるがほ

どの事にて候えば、よそにて凡夫さだめがたく候。ただ仏と行者との心にて知るべく候なり。⁽²⁴⁾

(阿弥陀仏の本願を信じてお念仏をとなえている人であっても、臨終の時に責め来たる耐え難い苦痛からは逃れることができません。しかし、たとえそのために悶絶しようとも、いよいよ息が絶えるというその時には、阿弥陀仏のお力によって心が静まり、安らかな気持ちで往生を遂げられるのです。臨終というのはあたかも一本の髪をスツと切るほどの一瞬のことですから、それがいつであるかは周囲の人は知るよしもなく、ただ阿弥陀仏と臨終を迎えたその人だけが知り得るのです。)

一連のご法語を通じて法然上人は、諸行無常の世のありさまを踏まえ、現世における最後の祈りとして、穏やかな死や安らかな死を願おうとも必ずしもそれが叶うとは限らない現実を示された上で、日頃からお念仏を相續していれば、必ずや阿弥陀仏の来迎引接にあずかって安らかな思いで臨終を迎えることができる、と述べられたのです。

こうした法然上人の教えを新型コロナウィルス感染症によって亡くなられた方にあてはめるならば、その臨終の様子がどんなに辛く悲しい状況であったとしても、阿弥陀仏はその方

のもとに來迎して、優しく声をかけてその方の心を安らかに導き、必ずや浄土往生を叶えてくださるということは明らかです。

〈4〉お念仏の回向

言うまでもなく私たち浄土宗僧侶は、檀信徒の方々はもちろん、広くすべての人々に向けてお念仏の布教教化に尽力する必要があります。しかし、前述したように死の縁は実に多様であり、新型コロナウイルス感染症によって亡くなられた方々も含め、私たちの力が及ばず、お念仏となえていただく前に死を迎える方も多くおられます。仮にお念仏となえることなくお亡くなりになられた場合、次のような法然上人のご法語に基づいて、私たち僧侶は、そのご遺族の方々と共に誠の心をもってお念仏を回向して、亡き方が阿弥陀仏の救済にあずかるよう祈りを捧げることが肝要となります。

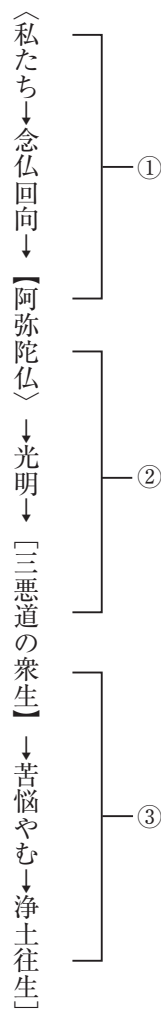
一。七分全得の事、仰のままに申げに候。さてこそ逆修はする事にて候え。さ候えば、のちの世をとぶらいぬべき人候わんも、それをたのまずして、われとはげみて念仏申して、いそぎ極楽へまいりて、五通三明をさとりて、六道四生の衆生を利益し、父母師長

の生所をたづねて、心のままにむかえとらんとおもふべきにて候也。又当時日ごとの御念仏をも、かつかつ回向しまいらせられ候べし。なき人のために念仏を回向し候えば、阿弥陀ほとけひかりをはなちて、地獄餓鬼畜生をてらし給い候えば、この三惡道にしばらく苦をうくる物、そのくるしみやすまりて、いのちおわりてのち、解脱すべきにて候。大經にいわく、若し三塗勤苦の処に在りて、此の光明を見たてまつれば、皆休息を得て復た苦惱無し、壽終の後皆解脱を蒙る。⁽²⁵⁾

(一) 死後の追善供養によつてもたらされる功德は、全体の七分の一ですが、生前に功德を積むとすべての得られるということについては、あなたの仰せの通りです。だからこそ、自身の死後の往生菩提に資するため、生前にあらかじめ善根功德を積む逆修は、勤めるのがよろしいでしょう。ですから、自身の菩提を弔ってくれる人がいるにしても、その人を頼りにすることなく、自らお念仏に励んで、死後は早く極楽へ往生して五通や三明を得て、六道や四生に迷う人々にお念仏の教えを広め、両親やお世話になった方々の生まれかわった所を訪ねて、思うがままにお浄土にお迎えしようと思うべきです。また、一方では常日頃のお念仏を何はともあれ回向して参りましょう。先立たれた方のためにお念仏を回向すれば、阿弥陀仏は光を放って、地獄・餓鬼・畜生の三惡道

に墮ちて苦しみにさいなまれている人々を照らしてください。すると彼等の苦しみは止み、そこでの命が尽きた後に三悪道から離れて極楽へ往生し、さとりを開くことができるのです。『無量寿経』に「もし苦しみ多き三悪道において阿弥陀仏の光明を見たとてまつれば、皆安らぎを得て、再びそうした悩み苦しみを受けることはない。そしてそこでの命を終えた後、皆迷いの世界を離れ浄土往生を遂げることが出来る」と説かれている通りです。）

法然上人は、このご法語の前半において、自身の浄土往生のため念仏相続に励むべきこと、そして、浄土往生の後、縁ある人々はもちろん、広く六道四生の衆生を浄土に迎え摂る還相回向に努めるべきことを促されています。その上で、後半では、『無量寿経』「光明歎徳章」の説示に基づきつつ、日頃の念仏相続を通じて、亡き方に向けた念仏回向に言及されます。ここで法然上人が開示される念仏回向は、次のような三段階で構成されていることが分かります。



① 私たちが修める亡き方に向けたお念仏の功德は、まずもって阿弥陀仏に回向する。

② ①のお念仏の回向を受けとめた阿弥陀仏は、私たちの意を汲んで亡き方（三惡道の衆生）に向けて光明を照らされる。

③ ②の阿弥陀仏の光明を蒙った亡き方（三惡道の衆生）は、現に住している世界において苦しみから開放され、命終の後、浄土往生を遂げる。

このように私たちは、聖道門諸宗における回向と異なり、念佛回向が成立するには、救済者阿弥陀仏を介することが不可欠であることを自覚しなければなりません。それは同時に、阿弥陀仏の大慈悲を正しく理解することが念仏者にとって必要であることを物語っています。いずれにしても、私たちが今は亡き大切な方々に向けて真摯に念佛回向を修めれば、阿弥陀

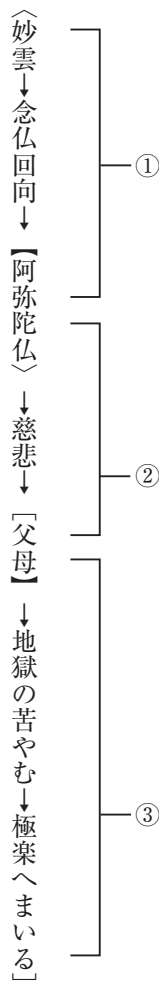
仏は私たちの切なる思いを受けとめて、清浄・歓喜・智慧など、この上ない働きを具えた光明をその方のもとに向けて明るく温かく照らし出し、命終の後、速やかに浄土往生を叶えてくださるのです。法然上人のご法語をもう一つ紹介します。

一。孝養の心をもてちちははおもくしおもわん人は、まづ阿弥陀ほとけにあずけまいらすべし、わが身の人となりて往生をねがい念仏する事は、ひとえにわが父母のやしないたてたればこそあれ、わが念仏し候功をあわれみて、わが父母を極樂へむかえさせおわしまして、罪をも滅しましませとおもわば、かならずかならずむかえとらせおわしまさんずる也。されば唐土に妙雲といひし尼は、おさなくして父母におくれたりけるが、三十年ばかり念仏して、父母をいのりしかば、ともに地獄の苦をあらためて極樂へまいりたりける也。⁽²⁶⁾

(父母に孝養を尽くし大切にしようと思う人は、まず父母のことは阿弥陀仏におまかせして、このように考えてみてはいかがでしょうか。すなわち「私が人として生まれ往生を願ひお念仏できるのは、ひとえに父母にお育ていただいたお陰なのですから、どうぞ阿弥陀さま、私がお念仏をとなえた功德に慈悲を發して、私の父母を極樂へとお迎え

くださって、父母の罪をも滅してください」と願うのです。そうすれば阿弥陀仏は必ず御両親を極樂へ迎え摂ってくださいなのです。ですから、次のような逸話が高僧伝に伝えられています。中国の妙雲という名の尼僧は、幼少の頃、父母を亡くしました。その後、三十年間にわたってお念仏を回向して父母の浄土往生を祈ったところ、父母ともに地獄の苦しみをやみ、極樂へ往生を遂げたということです。）

このご法語の前半において法然上人は、私たちがとなえたお念仏の功德を両親の浄土往生を願って阿弥陀仏に回向すれば、阿弥陀仏はその願いを受けとめてその両親を極樂へ迎え摂ってくださいと述べられ、後半では、念仏回向によって両親の浄土往生を叶えた妙雲の逸話を紹介されます。前述したご法語と同様、このご法語においても、法然上人が開示される念仏回向は、次のような三段階で構成されていることが分かり、阿弥陀仏を介して成立するところが、あらためて確認できます。



① 妙雲（私たち）が修める両親に向けたお念仏の功德は、まずもって阿弥陀仏に回向する。
 ② ①のお念仏の回向を受けとめた阿弥陀仏は、妙雲（私たち）の意を汲んで地獄（等）に墮していた両親に慈悲の働きを発動される。

③ ②の阿弥陀仏の慈悲の働きを蒙った両親は、地獄（等）の苦しみから開放され、命終の後、浄土往生を遂げる。

このご法語において法然上人は、「わか身の人となりて往生をねがい念仏する事は、ひとえにわが父母のやしないたてたればこそあれ」と述べられています。この述懐は、ご自身が念仏往生の確信を得られる以前に亡くなられた父時国公・母秦氏へ向けた法然上人の思慕と重ね合わせて受けとめることができるでしょう。さらに、このご法語において法然上人が扱

り所とされたであろう『戒珠集往生浄土伝』かいしゆしゅうおうじようじようどでんには、「妙雲が自身の浄土往生を母に問うと、母は近いうちに妙雲の浄土往生が叶い、菩薩として生まれ、親子の浅からぬ因縁によって極楽での俱会一処が実現する」という逸話が続いています。このように今は亡き両親が、私たちの念仏回向によって浄土往生を遂げ、共に極楽での俱会一処を叶えることができるという逸話を通じて、法然上人ご自身が、阿弥陀仏への帰依と願往生の思いを強くすると共に、父時国公や母秦氏を始めとする先立たれた大切な方に向けた念仏回向の実践をより一層深くされたであろうことを推測できるのです。

〈5〉俱会一処の真実

本章の最後に、重い病に臥せる正如房から今一度お会いしたいという懇願に対して、法然上人がお答えになった消息の一節を紹介します。

この世の見参はともかくても候なん。かばねを執する迷いにもなり候ぬべし。誰とてもとまりはづべき身にも候わず、われも人もただ遅れ先立つ代りめばかりにてこそ候え。そのたえまをおもい候も、またいつまでかと定めなさうえに、たといひさしと申す

とも、ゆめまぼろしいくほどかは候べきなれば、ただかまえておなじ仏のくににまいりあいて、蓮はちすのうえにてこの世のいぶせさをも晴るけ、ともに過去の因縁をもかたり、たがいに未来の化道をもたすけんことこそ、返すがえすも詮にて候べき。⁽²⁷⁾

(今、あなたとお会いすれば、あなたが亡くなった後、私はその亡骸に執着してしまふことでしょう。どんな人も、この世に身を留め置くことはできないのです。自分も他人も、お浄土に遅れて往くか先に往くか、ただその違いだけなのです。その時間の前後のことを考えてみても分かるものではありませんし、たとえその時間が長いとしても夢や幻程度のもので、どれほどの月日ではありますまい。ですから、私もあなたも阿弥陀仏の同じお浄土へ往生してそこで出会うのだということをよくよく心得て、蓮うてなの台でこの娑婆世界での憂いを晴らし、それまでの因縁について語り合い、また娑婆世界に還って共々に助け合い、人々を教え導くことこそが一番大切なのです。)

このご法語において法然上人は、お念仏をとなえる私たちと一対一の縦の相對關係を結んでくださる阿弥陀仏に帰依して浄土往生を叶え、そこで〈あなたと私〉という先立たれた大切な方との横の相對關係である俱会一処を必ずや叶えようではありませんか、と強く訴えて

いることが分かります。

新型コロナウイルス感染症によって亡くなられた方はもちろん、大切な方との死別がどれほど辛く悲しいものであったとしても、同じ浄土への往生を遂げれば、先立たれた大切な方と再会して、これまでの因縁について語り合うことができるというのです。極楽浄土とはなんと尊い世界でありましょうか。私たちは、ますますお念仏を励まずにはいられません。

【五】おわりに―法然上人への報恩謝徳―

これまで「法然上人における〈祈り〉について―新型コロナウイルス感染症を視座にいれて―」と題して、コロナ禍の中、寺院や僧侶へ望まれている「寄り添い」や「祈り」という期待に応えるべく、法然上人のご法語に基づいて、現当二世の「祈り」や大切な方への「寄り添い」を中心に考察を巡らせてきましたが、その肝要を抜粋して擲筆かくひつします。

まずもって法然上人のご存命当時は、毎年のように風水害や疫病、各種騒乱さわらんがおこり、まさに「当今は末法、現にこれ五濁悪世なり」の様相を呈していました。コロナ禍に覆われている今も、そうした末法の世が継続していると指摘できます。

その中で法然上人は、当時、広く修されていた種々の祈りとその効用を否定されることはありませんが、そうした祈りが本願念仏の相続を妨げてはいけなと戒められています。

また法然上人は、来世の浄土往生を第一義とする本願念仏であっても、お念仏による祈りがもたらすさまざまな利益は、他のいかなる祈りにも勝る功德があることを明言しています。なぜなら、お念仏の相続は、私たち自身の力の限界を素直に認め、そのすべてを阿弥陀仏に捧げているので、阿弥陀仏をはじめとする極楽の聖衆が幾重にも護念してくださり、魔縁がつけている隙がないからです。したがって、浄土宗においては、新型コロナウイルスをはじめとする疫病退散の祈りとしては、お念仏の相続を中心とするのです。

その一方、法然上人は、種々の祈りはもちろん、お念仏による祈りであっても、それには限界があることを素直に認め、実存的な視点を通じてこの現実世界のありようを冷静かつ客観的に見つめておられます。もちろん、多くのご法語に述べられているように、阿弥陀仏の本願力や極楽の聖衆による護念によって、念仏行者には転重軽受や延年転寿などの利益が常にもたらされています。しかし、その上で法然上人は、阿弥陀仏の力をもつてしても、娑婆世界における諸行無常の道理を覆せようはずがないことを指摘されるのです。つまり、たとえ尊き念仏行者であっても、それぞれの縁に応じて事件や事故に巻き込まれることもあり、

重い病を患うこともあり、若くして命尽きることもあるのです。例えるならば、尊き二人の念仏行者であるA氏とB氏には、それぞれに転重軽受や延年転寿の利益が常にもたらされており、その上で、各自がこれまでに積み重ね、巡り会ってきた縁の相違が現世の相違として表出しているのであり、結果として表出している現世の相異だけを取り上げて、煩惱具足の凡夫である私たちが、他者に対してお念仏や信心の過不足を論じてはいけません。

日課六万遍、晩年は七万遍ものお念仏を相続された法然上人ご自身も、建久八年（一一九七）や元久二年（一二〇五）に重い病を患われたことが知られており、『要義問答』には次のように述べられています。

まことにこの身には、道心のなき事と病ばかりや嘆にて候らん。（中略）天上にうまれてたのしみにほこるといえども、五衰退没のくるしみあり、人間にうまれて国王の身をうけて、一四天下をばしたごうといえども、生老病死・愛別離苦・怨憎会苦の一事もまぬがる事なし。⁽²⁸⁾

（まったくもつてこの身には、さとりを目指す志が発らないことや病気になることばかりが悲しみです。（中略）天上界に生まれて享樂にふけったとしても、いずれはその

身に五種の衰えが現れて苦しみ、人間界に生まれて国王の身となり世界中を統治したとしても、生・老・病・死・愛別離苦・怨憎会苦などの苦しみからはどれ一つとして逃れることなどできません。）

このように法然上人は、病をはじめとする四苦八苦はいかんともし難いことを述懐されています。このご指摘は、マスク着用やアルコール消毒など新型コロナウイルス等の対策を一念に実施していても、残念ながら病に罹患（りかん）してしまうことがあるという現実についても、例外なくあてはまることでしょう。もちろん、だからといって、そうした対策を怠（おろそ）かしていないというわけではありません。

その上で法然上人は、現世の利益に重きを置かず、後世の一大事たる浄土往生を決定することを促されます。先の例えであれば、現世に表出した相がどれほど異なろうとも、念仏行者であるA氏にもB氏にも等しく浄土往生は叶えられるのです。このように、どこまでも現世の祈りは二次的・副次的なものであって、わが命最後の浄土往生こそ第一に目指すべきことなのです。

以上のような法然上人の教えに基づく揺るぎない信を確立することができた念仏行者は、

日頃の念仏相続を通じて阿弥陀仏の光明に浴し、心おだやかな日々を送ることができるようになるのです。そして、たとえ現世での延年転寿や転重軽受の祈りが叶わなかったとしても、あるいは、自身の死や大切な方との死別が唐突にわが身を襲ったとしても、日頃からお念仏をと覚えていれば、阿弥陀仏は私たちの声を聞き逃さず、私たち自身や大切な方の臨終の場に来迎引接され、極楽浄土での俱会一处を必ずや叶えてくださるのです。

私たち浄土宗僧侶は、あらためて浄土宗の教えのありがたさを胸に刻み込むと共に、こうした尊い教えをお示しくださった法然上人への報恩謝徳の思いとお念仏の布教教化の決意を強くせずにはられません。

自信教人信 難中転更難 大悲伝普化 真成報仏恩 聖名十念 合掌

【註】

(1) W H O 発表 (二〇二二年二月三〇日時点)

(2) (「仏教に関する実態把握調査 (二〇二〇年度臨時調査) 報告書」新型コロナウイルス

感染症が仏教寺院に与える影響」三七頁

(3) 前出(2)に同じ

(4) 『浄土宗聖典』三卷九七頁〈典拠漢文〉

(5) 『日本史総合年表』一七二～二〇一頁(吉川弘文館、二〇一九年)

(6) 『昭法全』六六四頁

(7) 『昭法全』六九七～六九八頁〈典拠漢文〉

(8) 『昭法全』六七〇頁

(9) 『昭法全』六八一～六八二頁

(10) 『昭法全』六六六～六六七頁

(11) 『昭法全』五〇四頁

(12) 『昭法全』五三〇頁

(13) 『鎌倉の二位の禅尼へ進ずる御返事』(『昭法全』五三二頁)

(14) 『ある人のもとへつかはす御消息』(『昭法全』五八六～五八七頁)

(15) 『鎌倉の二位の禅尼へ進ずる御返事』(『昭法全』五二七頁)

(16) 『九条殿下の北政所へ進ずる御返事』(『昭法全』五三四頁)

- (17) 『浄土宗略抄』(『昭法全』六〇三頁)
- (18) 『選択集』第一章(『浄土宗聖典』三卷一六〇～一六四頁)〈典拠漢文〉
- (19) 『選択集』第五章(『浄土宗聖典』三卷一八二頁)〈典拠漢文〉
- (20) 『昭法全』六三〇～六三一頁
- (21) 『浄土宗略抄』(『昭法全』六〇四頁)
- (22) 『昭法全』六九一頁
- (23) 『往生浄土用心』(『昭法全』五六四頁)
- (24) 『往生浄土用心』(『昭法全』五六三頁)
- (25) 『往生浄土用心』(『昭法全』五六〇頁)
- (26) 『示或人詞』(『昭法全』五八七～五八八頁)
- (27) 『正如房へつかはす御文』(『昭法全』五四〇頁)
- (28) 『昭法全』六一三頁

◎第2章◎

法話・布教実例

法話 「疫禍における浄土宗のみ教えの説き方」

奈良教区 西迎院 中村 晃和

「疫禍における浄土宗の教えの説き方」について書かせていただく前提として、私たちが生きる現代社会は、いかなる社会であるかを認識しておかねばならず、また、新型コロナウイルスを出現させ、世界にパンデミックを引き起こした現代社会とは、いかなる社会であるかを検証しておかねばなりません。

法然上人は「仏道修行はよくよく身をはかり、時をはかるべきなり」と仰せになっておられます。ご承知の通り、身をはかりとは、私たちの機根、すなわち素質や能力のことです。法然上人ご在世の時代を生きた人は、愚痴・愚鈍、罪悪生死の凡夫であって、後世を恐れる心を持ち合わせ、末法の世を生きている自覚を持っていました。

ところが現代はどうかといえ、自分の心の内側をまざまざと眺めることをしない時代となり、起きた事象を相手のせいにし、反省、懺悔のない「私は悪くない症候群」がはびこる社

会となりました。

全仏教の共通するところとして、み仏を信ずる前に、まず自らを見つめることを要求します。法然上人は「初めには我が身の程を信じ、後には仏の願を信ずるなり」とお説きくださっています。そして仏教は、煩惱・欲望を欲しいままにしないで、慎むことを説き、そこに心の平安と喜びを見出す教えでもあります。ところが現代は煩惱・欲望を肯定し、満足することに「喜び」と「しあわせ」を求める社会となりました。すると、煩惱・欲望には限りがないので、満足は得られるはずもなく、不平不満が生じてくることは当然です。まさに五濁増の時代であり、人間の質が低下した時代であります。それであるのに現代人の多くは、過去の時代を生きた人より優れていると思ひ込んでいるところに大きな問題があります。

現代社会は、仏陀釈尊や法然上人のみ教えと反対方向に進んでいる「反仏教社会」と言えます。

さらに現代と法然上人のご在世の時代が決定的に違うところは、科学が発達しているかどうかです。私たちは、科学で証明された事のみが真実であり、科学で証明されないものは非科学的で真実でないと、知らず知らずのうちに教育されています。一種の科学信仰の中にあります。コロナ禍においても、感染症の専門家と言われる人によりメディアを通じて幾度とな

く科学的エビデンスという言葉が使われてきました。もちろん科学的検証は大切な事ではありません。しかしながら、それが浸透し、科学万能主義となりますと、法然上人が長い年月のご苦勞下され、ご実体験された人間次元を超えた高次元界の事実である極樂浄土、阿弥陀如来、お念仏はまるで絵空事やお伽話のごとく受け取られる事となります。

それに加えて、学校教育の中に宗教教育がなされていません。近代のヨーロッパ貴族、ウエリントン公爵アーサー・ウェルズリーは「宗教なき教育は智慧ある悪魔をつくる」と警告しており、その通り「いじめ」等により自ら命を絶つ悲しい出来事が後を断たず、教育の場が混乱しています。一番大切な宗教教育がなされないのですから、無宗教的人間がどんどん世に出てくることになります。

振り返ってみて、仏教はインドから消え、中国から消え、朝鮮半島からもほとんど消えてしまいました。この事実から見て、そう遠くない未来、日本から消えてしまうことも予想されます。いや、今や日本から消えなんとする事態を迎えていると言えます。

尚、申し添えておきますと、仏法が衰えるという事は、仏法自体に問題があるのではなく、仏法は三世を貫く真理ですから、永遠不変のものですが、尊い真理を受けとる側の人間の機根が衰えてしまい、受け取れなくなっているという事です。仏法が受け取れず仏法から離れ

ていく社会の姿は、『無量寿経』下巻に「無有自然 勤苦求欲 転相欺诒 心劳形困 飲苦食毒」とあり、まさにそんな世界が現出しています。

徐々に意識しないままに人々は仏縁から遠ざかるうとしており、無宗教者に満ち溢れた現代社会となりました。それにつれて、私たちの布教教化の場もどんどん細く狭くなっています。宗教儀礼の簡素化が進み、少子高齢化社会とあいまって、家族葬、直葬、通夜をつとめない葬儀、中陰を省略、年忌（法事）の減少と参詣者の少人数化が進んでいます。例えば、縁者を招き百人の参詣者のお通夜をつとめるのと、家族だけの十人でつとめるお通夜とでは、九十人の人が仏教とご縁を結ぶ機会が減少することになります。そこに加えて、新型コロナウイルスの出現で、寺院での年中行事の中止、延期、減少等で布教教化の場が少なくなっているのが現在の状況です。

しかしながら、ことさらに悲観的に見なくてもよいとの声も聞かれますし、まだまだ日本人の長所や美德もたくさん残されています。そして「縁なき衆生は度し難し」とも言われ、さらに法然上人は「強^{あなが}ちに信ぜざらんは、仏なお力及び給うまじ。いかに況や凡夫の力、及び候うまじき事なり」（『勅伝第二十八卷』）と仰せられています。ですから、縁ある方々に布教させていただいたら良いのだと言えます。その通りであり「もし少しも念仏に心を掛け

候わん人をば、いよいよ御勧め候うべし。これも弥陀如来の本願の宮仕いと思し食し候うべし」(『勅伝第二十五卷』)と告示くださっております。私たちは先を見据え、精一杯お念仏のご縁結びの為に精進させていただかなければなりません。前提としてこれらのことから、布教教化にあたって共通認識しておく必要があります。

さて、本題の『疫病における浄土宗の教えの説き方』について、実際の布教事例については、六名の布教師さんがお書きくださるので、私は、ここ二年間のコロナ禍においての布教体験を書かせていただきます。

現在、コロナウイルスの感染が始まってから二年余りが経過しましたが、その間にご依頼をお受けした法話の多くは、延期または中止されました。六カ寺のご寺院からは、例年通りご依頼があり法話をさせて下さいました。これらのご寺院は、ここ七、八年、法話させていただいてきたご寺院ですので、様子はおよそ分かっていました。やはり例年に比べ参詣者は少なめでした。また高齢の方も多く、感染の不安もあってか、少し緊張気味のご様子でした。そこで、他寺六カ寺と自坊の定例法要等で次の七項目を時に応じて実際に法話させていただきました。

(一) 新型コロナウイルスはどうして発生したのか

檀家さんにお参りさせていただくと「人間の勝手がウイルスを作り出したものですね。そう思います」との声をよく聞きました。

長崎大学 山本太郎教授は、ウイルスと「共生」の中で、人間による開発や乱獲などで野生動物を宿主にしていたウイルスが「生存権」を侵害され、生き残りのために宿主を人間に乗り換えたと説明され、イタリアの作家ジョルダノ氏も著書で「ウイルスは環境破壊が生んだ難民の一部」と訴えているように、人間の勝手な振る舞いが起こしたものと述べておられます。多くの識者も同様の分析をしております（毎日新聞「みんなの広場」小田隆一氏「自然との共生、大切だ」）。

さすれば私たちの生活の有り方が今、問いなおされています。生態系を壊さないような生活が大切であり、謙虚に他の生命に畏敬の念を持ち、私たちを生かしてくださいと語る自然を大切にする仏教的生き方に努めることを伝えました。

(二) 新型コロナウイルスがもたらしたこと・・・行動変容

「コロナ禍によって、かつてない制約の増加」

①常にマスクをつけた生活を余儀なくされた事。

②行動の自由が制限された事。

③人は人と顔を合わせて話すことで心が通い合いますが、感染防止のため極端に接触が制限され、オンラインやステイホームが要求されるようになった事。

地球上を住まいする三百万種とも言われる生命体は、いずれもその生命体独自の制約の中で生きてゆかなければなりません。魚は水中を離れては生きられません。モグラという生命は土の中を住み家とし、狭い範囲の土の中でミミズを捕食して生き、地上の世界はモグラにとっては死の世界であります。いずれもそのような制約の中で生きる生命体です。

この世界を住まいとする私たちは、寒・熱・湿・餓等の苦より生ずる苦しみ（苦々）、楽しみの破壊から来る苦しみ（壊苦）、全てが生滅変化する苦しみ（行苦）などの苦しみ、制約から免れることの出来ない生命です。

そこへ①②③のごとき制約が増加したことは、私たち人間の生命のレベルや質が低下し、人間が人間以下に墮しつつあることを認識しなければなりません。そのことを話してきました。

四苦八苦他、様々な制約から解き放たれ、六道輪廻を解説し極楽浄土へ往生させていただ

くことが仏教の一大目的であり、生死解脱ということです。生死解脱とは、制約の中にありながら、制約に左右されない世界に生きることでもあり、取り巻く環境は変わらないが、それに左右されることなく、平安を保つ心の状況を言います。それは称名念仏の中、仏の光明に照らされ、本願力の働きによって開けてくる世界であります。

そのような信仰の境地を法然上人は「生けらば念仏の功つもり 死なば浄土へまいりなんとでもかくてもこの身には 思い煩うことぞなし」と仰せになりました。法然上人は晩年、大変な法難にあわれましたが、全く動じられることなく生死解脱の世界においてになり、ご流罪すらも朝恩と喜ばれました。この事実は私たちの大いなる希望であり目標でもあります。煩惱深くして底ない私たちが、現世で悩み苦しみから離れることは出来ませんが、称名念仏の教えの中に、煩悩悩みが少しずつ解決されることを説き示していくべきです。

(三) 新型コロナウイルスが私たちに突き付けてきている事

医学の進歩、食糧事情により平均寿命が飛躍的に伸び、死を遠くにおき、無常を実感することにくくなった現在。コロナウイルスの感染爆発によって、いつ自分が感染するかわからない不安、それにより死に至るのではないかという恐怖、そして身近なものに自分が感染

してうつしはしないかという心配が生まれました。

私の友人が令和三年五月に実際に感染しました。それから半年を経過して、やっと私に当時の心境を語ってくれました。夫婦二人が感染されたのですが、はっきりした感染経路も分からずじまいでした。彼の妻は中等症で、彼は軽症で済んだそうですが、高齢でもあり、重症化して死に至るのではないかという恐怖に襲われ、退院するまでは全く気が休まることはなかったと語ってくれました。そこで私は彼に療養中お念仏を申しましたかと尋ねると、心配で恐怖のあまりそのような気持ちが全く起こらなかったと申しますので、五重相伝を受けた身なのでお念仏申すことを忘れないように勧めました。

私たちの周囲には、常に無常の風が吹いているのであって、無常を感じることが仏教への入信の入り口でもあります。仏教は死の一字を説くと言われ、元祖法然上人始め、祖師方は常に無常を説いておられます。二祖様は「念死念仏」を言われ、釈尊は『無量寿経』の中で「設満世界火 必過要聞法 会当成仏道 広済生死流」（たとえ世界に満つる火をも、必ず過ぎて法を聞け。必ずまさに仏道を成じて広く生死の流れをすくうべし）と説いておられます。この経文を引いて善導大師は「大千世界に満つる火もくぐりてみ名を聞け」『往生礼讃』と説かれています。私はコロナ禍における布教でこの経文を讃題として仏教は生死巖頭の救い

を説き、死を前にした極限状況にあつて、救いと歎びを与えてくださるのが本願念仏であることを説かせていただきました。

生死巖頭にあつて、救いと喜びをいただかれたS・Hさんをご紹介します。

彼は大変仏縁の深い方でしたが、慢性の気管支喘息の持病を持つておられ、やがて肺気腫症になられ、いつも咳をされていました。年月は流れて、ある年の早春、インフルエンザが大流行したとき、インフルエンザにかかれ肺炎になり再起不能になりました。激しい呼吸困難になられ、傍目にも痛々しく苦しうでした。ところがご本人は少しも苦痛がなく、何かしら嬉しくありがたい気分が起こつてきて感謝に耐えられず、又すべてが美しくて美しくてたまらないと言われるのです。奥さまが水を飲ませてあげると「甘露の味とはこのことだ。こんな美味しい水は初めてだ」と喜ばれ、お見舞いにいただいた花を見ては「なんと美しい、こんな美しい花は初めてだ」と感嘆され、医療に当たってくださった方々には感謝するばかりで、喜びに満ち溢れてお念仏の中に息を引き取られました。その崇高なお顔はまさに菩薩の如く、肉親の方もそのお姿に悲しみを忘れ、合掌して念仏申されるばかりでした。

死苦を取り除く仏の願のあることを説きましょう。（第十九来迎引接の願）

（四）コロナ禍で宗教が問い直され、真価が問われている

二〇二〇年十一月十九日号の毎日新聞に「コロナで変わる世界」と題し特集が掲載されました。

イタリアのデイエゴ・フェデリーチ（35）さんは、両親を新型コロナウイルスによって亡くされた。死に目にも会えずに、悲しみに暮れる中で。そして言われるのは「今までは私もほどほどの信仰心があったが今はもうない。こんな状況になって神を信じられると思いますか。神はなぜこのような悲劇を許すのか」と悲痛な思いを語っておられた。

神が人間を造ったとするキリスト教では、こういう考えが起こりうるのでしょうか。今の日本人も同じような思いを持っており、宗教に不信を抱いている人が増加しています。まずはっきりさせておかねばならないのは新型コロナウイルスは、神・仏が造り出したものではなく、先に取り上げました人間がひきおこしたものであるということを自覚しなければなりません。

そして次に、神・仏に祈ればコロナウイルスが収束するがごとく信じている人も多く、それが宗教だと思っている人もいます。又、神社仏閣において収束を神・仏に祈願している様子がテレビ等で放映されています。

願いとしては誰しもが願う事であり、わからない事ではありませんが、自分の都合のよいように環境が変わる、と受け取るような宗教は間違いであります。

法然上人は『浄土宗略抄』（転重軽受）

「宿業限りありて、受くべからん病は、いかなる諸々の仏・神に祈るとも、それによるまじき事なり。祈るによりて病も止み、命も延ぶることあらば、誰かは一人として病み、死ぬる人やあらん」と仰せになられています。まことに明快なお言葉です。このご法語の後に「転重軽受」「延年転寿」が説かれており、一見すれば矛盾しているようなお言葉が続きます。そこで私たちが起こす願いについて触れておきます。

凡そ「願」には三等あり、

一つには現世における福德寿命を願う（下願）

二つには後世の人間の高貴生天等を願う（中願）

三つには人天生死の幻事を厭い出離生死往生浄土を願う（上願）

前の二願は中・下といっても、それは一応の分別であって、実を言えば

この二願の如きは痴福で、むしろ三生の怨みである。（藤堂俊章台下『発願文入門』）

この「願」についての解説に示されるように、来世に極楽浄土に往生させていたいただきたいの願いを起すのと、今生における福德を願う事とは異なるという事です。何故なら、今私たちは現世を生きていますので現世における福德は願いやすく、死後の世界の存在は大変信じ難いものです。三世を信じられる人にして極楽浄土を願う「願往生心」が起きるものです。これははなはだ難しく、釈尊は先刻ご承知で、小経には難信の法であるとお説きくださっています。そのことを踏まえた上で、釈尊、善導大師、法然上人以下祖師方は西方極楽浄土へ往生させていただきたいとの願いを起すことの大切さをいたるところでお説きくださっています。

西方極楽浄土への往生を願って念仏申す人にして、現世において、転重軽受、延年転寿の利益が副次的「不求自得」に付き添ってくるものです。

そのところを、『元祖大師ご法語』後編第二十六章 仏神擁護（浄土宗略抄）に「弥陀の本願を深く信じて、念仏して往生を願う人をば、弥陀仏より始め奉りて、十方の諸仏、菩薩、観音、勢至、無数の菩薩、この人を圍繞して、行住坐臥、夜昼をも嫌わず、影の如くに添いて、諸々の横悩をなす悪鬼悪神の便りを払い除き給いて、現世には横ざまなる煩いなく、安

穩にして、命終の時は極楽世界へ迎へ給うなり」とお説きくださっています。

そのところ「されば後生をいのり、本願をたのむ心も薄き人は、かくのごとく圍繞にも、護念にもあずかる事なしとこそ善導は宣ひたれ」と極楽浄土へ往生させていただきたいとの願いをおこすことの最も大切なこととお説きくださっています。

それでは、真の宗教とは何かという事になります。

宗教の「宗」とは、人生にあつて最も大切なものという事で、それを教えるものが宗教という事になります。

人類の歴史は、人間はなぜ生まれてきたのかを問う歴史でもありました。いったい(1)私はどこから来て、(2)何をするために、(3)そして、この私の命はどこへゆくのか。これを人生の三大疑問と申しますが、この三大疑問の解決こそが宗教であり、就づく仏教の目的であり、仏道を行ずることでは必ず解決が得られることを説くことが大切です。

(五)コロナ禍にあつて解決の指針として

今回の『布教羅針盤』ご門主猊下は、ご教諭の最初に「災厲不起」のご文がある祝聖文をお示しになられました。

ご承知のように、祝聖文は修正会において又、日々の勤行のなかでも唱える大切な経文『無量寿経』の一節であります。訳文を示しますと、「天下和順し日月清明なり。風雨時をもつてし、災厲起こらず、國豊かに民安くして兵戈用いる事無し。人民徳を崇め仁を興し、つとめて礼讓を修す」。この祝聖文の中で「災厲起こらず」とは、災害や疫病などが起こらないとあり、私たちが望んで止まない平和で安穩で理想的な世界が示されています。ところで、このような世界が実現したのは、この経文の前に「仏の遊履したもうところ、國邑丘聚化を蒙らざるはなし」とあり、仏が歩みゆかれたところと示されていることに大切な意味があると言えます。正しい仏法が広がり、人々が仏法を信じ行じたところに必ずよい社会、よい国が出来るというお言葉です。

今のように、仏陀釈尊や法然上人のみ教えと反対の方向に進んでいる社会は、仏・菩薩のお護りからはずれ乱れるのは当然であります。

今から千三百年ほど前の話ですが、インドの戦国時代の王さまがおりました。仏門に帰依して、国民にいたずらに殺生をしないよう呼びかけ、自分自身も仏道修行をなされて殺生を戒め徳を積まれました。その当時はインドの戦国時代でしたが、その王さまの国だけは在位六十年の間一回も外敵から侵略されることがなかったという話です。み仏の教えを仰ぎ行じ

ていくことによって、み仏のお護りをいただき、平和で安心な世界となります。

ところで法然上人のお伝記には「洛中は闐靜堅固なれども、吉水の庵室はひとり安穩なり、これ念仏するが故なり」とあります。

京都の市内は騒がしく落ち着かないが、少し離れただけの吉水の庵室、法然上人がお住まいしておられる所、今の知恩院のあたりは清浄で明るく言い知れぬほど和やかであった。それは法然上人がお念仏を申されて阿弥陀さまのお護りの中でお過ごしであったからです。このところを東京大学名誉教授で日本仏教の研究に一生を尽くされた玉城康四郎先生は「法然上人のお念仏は体全体でとなえておられたに違いない。又、お念仏申す中に、身も心も安らいでおられたに違いない。」と書き残しておられます。

『無量寿経』に「願我國亦然」と説かれていますように、私たちが仏道を行じていったときに、理想的な社会に近づくところとあり、そのことを祝聖文をもって示し伝えていくことが大切です。

（六）コロナ禍不安・心配を和らげるため

お念仏呼吸の実践

コロナ禍、人々は心配、不安、恐怖や閉塞感にとらわれ、心を病む人が増えました。何よりマスクを着けていると十分空気が吸えず息苦しく、何とも不快になりがちです。「息」というのは、ことのほか大切で、息という字は「自」と「心」からできています。

息を整えることは自分の心を整えることにもなります。息を整えることを「調息」と言います。釈尊は、ことのほか息を整える、すなわち呼吸することの大切さをお経の中で四つにまとめておられます。『大安般守意經』

(1)「入る息、出る息を守り続ける」つまり呼吸のリズムを大切にすること。(2)呼吸を意識的にとることの大切さ。平生私たちは「今」呼吸していることを無意識にしている。(3)吐く息が先―呼吸は吐く息から始まる。呼吸の「呼」は吐くこと。生まれたての赤子はオギャーと泣きますが、「オギャー」は吐く息です。ちなみに西洋は吸う息から始まる。(4)腹圧を使う(腹式呼吸)よく丹田と言いますが、おへその下、下っ腹に腹圧をかけて息を吐ききる。すると心が落ち着いてくることが実感されます。そこで私は「念仏呼吸」をおすすめしてきました。念仏呼吸とは、お念仏と呼吸とをうまく合わせることです。ナムアミダブツ・ナムアミダブツとなえながら阿弥陀如来の本願の頼もしいことを念じ、少しずつ息を吐いていき、最後まで吐ききってしまいます。吸うときお念仏を申しながら吸っていたく。できる

だけ長い息を心がけていただく（但し無理のない程度で）。念仏呼吸をします。

精神的にも和らぎますし、健康にもよい。阿弥陀如来を仰ぎ信じ、お念仏を申すことでおのずから生命力が高められることをお話してきました。

(七)疫病に感染した時

（平生の念仏が最も大切であること）

コロナ禍にあつて、感染しないように注意することは大切ですが、いつ誰もが感染する可能性があります。

感染した時のことを平生から想定しておかねばなりません。自身やあるいは身近な人が感染したことが判明したときには、十分な医療を受けることはもちろん大切ですが、お念仏を申すことをお勧めしなければなりません。

先に感染した友人の例を引きましたように、感染した時には誰もが色んな心配や不安、恐れに襲われることになります。その課程における病苦、そのなかでも死に向かつていくのではないかという恐怖が一番ではないでしょうか。そのときにいだけ家族に看取られることなく死を迎える怖さ、寂しさは大変大きいものです。家族に看取られて死んでいくことは、皆

が願う理想ではありませんが、人の死にざまは様々で、突然死あり、孤独死あり、計らざる災害や交通事故で命終を迎えることも多々あります。実際、死にゆく時はいずれの死に方を迎える場合も『無量寿経』には、人は「独生、独死、独去、独来」であると説かれています。だからこそ私たちは、感染した場合はもちろん大切ですが、平生の念仏を怠ってはならないことを説かねばなりません。

平生、念仏を申した者は必ず仏の来迎をいただくことができます。ここを法然上人は「大胡太郎へ遣わすご返事」の中で、「ただの時によくよく申しおきたる念仏によりて、臨終に必ず仏は来迎し給うべし」と述べられています。平生、念仏を申している人は、例えどのような死を迎えたとしても、仏は必ず死苦を取り除いてくださり、極楽浄土にお迎えくださるという事です。

死は本能的に恐ろしいものです。自分の修行や覚悟によって死が恐ろしくなくなるわけではありません。本願を信じ、念仏申しておれば、おのずから解決がついてきます。怖がっていないし、悩んでもよい、不安があっても良いのです。煩惱によってさええられていてもいい。必ず仏は解決を与えてくださいます。

古代インド・コーサラ国のハシノク王は釈尊に次のようなことを尋ねておられます。

「凶暴な象や、あるいは敵が襲ってきたとき、私は仏陀を念ずることを忘れているだろう。そのような状況に置かれて、私が死んだらどのような世界に行くのか心配だから教えていただきたい」

すると釈尊は「王よ、東向きに立っている木があるでしょう。その木が倒れると、どちらに倒れるか」と問われた。王が「東に倒れる」と答えると、釈尊は「そうであろう。平生仏陀に心に向けている者は、例え一時仏陀を忘れていたとしても仏陀のもとにいく。心配することはない」とお説きになられ、ハシノク王は安心されたと伝えられています。

法然上人は『往生浄土用心』において「人の死の縁は、かねて思うにもかない候わず。にわかの大径にて終わることも候う。また大小便利のところにて死ぬる人も候う。前業のがれがたくて、太刀、かたなにて命を失い、火に焼け水に溺れて命を滅ぼす類多く候えば、さようにて死に候とも、日ごろの念仏申して極楽へ参る心だにも候う人ならば、息の絶えん時に阿弥陀、観音、勢至来たり、迎え給うべしと信じおぼしめすべきにて候う」と、また、同じ内容を「甘櫓太郎忠綱に示す御詞」の中で、「弓箭の家に生まれたる人、たとい軍陣に戦い命を失うとも、念仏せば本願に乘じ来迎にあずからんこと、ゆめゆめ疑うべからず」とお説きくださっています。

人々には平生の念仏の大切さを法話し、日課の念仏を励むことをすすめることが大切であります。そして、必ず仏は解決と救いを約束してくださっているから安心して念仏申すことをすすめていかねばなりません。

以上、七項目に分けて説明してまいりました。

終わりにあたり、今や温暖化の進行によって地球規模の多くの災害が発生し、生命が危機にさらされ、世界中の国々が国益を主張していがみ合い、平和から遠ざかり、国内においては殺人事件が日常茶飯事となり、全く理解の及ばない残忍極まる事件が多発し優しさに欠けた社会になりました。

仏法が人々の心から消えますと、このような社会となります。

聖徳太子は「十七条憲法」の第二条で、三宝帰依の大切さを説き、「三宝によらずんば何を以ってかまがれるを直さん。」と喝破しておられます。仏教によってしかこの難局を解決できない事を私たちは発信していかねばなりません。幸せを残すためにも。

そして必ず解決があることを発信してまいりましょう。

み仏を頼まで何か頼むべき憂きこと繁き世の中にして

布教実例「生きる意味」

青森教区 西光寺 工藤 大樹

(※さまざまな布教の場面を想定し、最初の挨拶などは省略させていただきます)

まさか、コロナ禍と呼ばれるような世の中になるとは想像もできませんでした。一人として影響を受けなかった方はいないほどの大きな事態となっています。事実、これまで日本だけでなく、一七〇万人もの方々が感染され、一万八千人もの命が奪われました(※原稿執筆時)。また、生活が成り立たなくなった方々もたくさんいらっしゃいます。他にも、それぞれにさまざまな苦労があったことと思います。思い通りにならない世の中であることを、改めて実感させられているコロナ禍の日々です。

そのような中で、心の病を専門とする医師の方が、「コロナ禍は、生きる意味を失わせつつある」とおっしゃっていました。その先生のもとにも、ご相談に来られる方がたくさん増

えているそうです。今こそ、「南無阿弥陀仏」のお念仏をとなえることに、まさに「生きる意味」があるということを、お取り次ぎさせていただきたいと思っております。

思い通りにならない世の中を精一杯生きる私たちです。そのような私たちのことを、決して見捨てず、大きなお慈悲の御心で思い、救い導いてくださる阿弥陀さまがいらっしゃる。

そして、苦しみの世界を生まれ変わり、死に変わり、「輪廻」を巡り、今もなお、その中で必死に過ごしている私たちです。そのような私たちを苦しみの世界から救い摂るために、阿弥陀さまがご用意くださった極楽浄土があります。

その極楽浄土に往くために、阿弥陀さまを選んでくださった、勝れた易しいお念仏があります。

本来であれば、自分の力では到底、往くことが出来ないお浄土です。それは、私たちが煩惱を抱えながら、輪廻を巡る原因となるような悪い行ないをしてしまうからです。知らず知らずに、行為や言葉で人を傷つけ、醜い心を抱いてしまいます。そのために、涙を流し、辛く苦しい思いもいたします。

そのように至らぬ私たちのために、阿弥陀さまご自身がお念仏という行ないを選び、この至らぬ私たちが極楽浄土に救われていくほどの大きな功德をお念仏に込めてくださったのです。この私を素直に見つめれば見つめるほどに、阿弥陀さまの大慈悲が、お念仏の尊さが、より深く感じられてまいります。

いま、この終わりなき苦しみの世界で、お念仏の御教えに出会い、極楽浄土に救われていくという有難い機会を得ている私たちがいます。もう二度と苦しみ続けなくて良い極楽浄土に往くための「私」を得ることができたのです。そして、今も決して一人ではなく、阿弥陀さまの大きなお慈悲の中で、阿弥陀さまと共に生きていくことができる私たちです。このお念仏をとнаえる歓びとともに、お念仏をとнаえることこそが、何よりも今を生きる意味であり、生きる価値だと心から受け止めさせていただいております。

私たちの生きる道は山道に喩えられることがあります。上り坂があり、下り坂があり、そして「まさか」があります。この山道を振り返ってみますと、苦しい坂道が多かったのではないのでしょうか。悔しい思い、辛い思い、後悔もたくさんあったのではないのでしょうか。必死に歩んできたその道も、輪廻という果てしない道の中にいます。今の足下を見てもガタガ

々な山道です。そして、この先も見通せず、不安でいっぱいです。いわば真つ暗闇の中、弱い足で、つまずきながらも、精一杯歩んでいるのが私たちなのではないでしょうか。

いまそこに一筋の光が差し込んでいます。私たちに阿弥陀さまが救いの手を差し伸べてくださっています。その手をしっかりと握り返す、つまり、お念仏をとなえ、支えとさせていただき、その光に照らされた山道を、前を向いて、より良く歩んで行くのです。そして、その道の先はもう地獄の谷底ではありません。命終わるその時に、阿弥陀さまが頂ともいえる極楽浄土へと救い摂ってくださいなのです。

いまコロナ禍の中で、立ちすくむ方々も、阿弥陀さまの大慈悲を信じ、お念仏をとなえ、前を向いて歩まれることを願うばかりです。極楽浄土に向かうための光り輝く道を歩む歓びの中で、相変わらず不安定な足下かもしれませんが、お念仏を支えにより良く歩むという、生きる意味がここにあるのでございます。

まだまだ不安な日々は続くかもしれません。思い通りにならない中を精一杯生きる私たちを見守ってください、必ずお救いくださる阿弥陀さまがいらっしやいます。先立たれた大切な方々も待つ極楽浄土は必ずあります。いつか極楽浄土で、阿弥陀さまに、そして先立たれ

大切な方々に、少しでも褒めていただけるように、お念仏をとなえ、支えとさせていただきながら、より良く過ごしていきたいものでございます。

阿弥陀仏と 称うる声を 力にて つとむる身こそ 心安けれ

※コロナ禍において、布教の仕方を模索されたことと思います。例えば、インターネットの活用や文書伝道の充実を図った方もいらっしゃると思います。今回は、そのように聴衆が目の前にいない場合も念頭に入れながら、執筆させていただきました。また不特定多数の人が耳にする場合があるということも意識いたしました。もちろんこれまでと何も変わるものではありませんが、どのような人がどのような心持ちで法話に触れられるのかわからないというところに、十分注意し、布教実例として提示させていただきました。

布教実例「仏さまと共に」

東京教区 善光寺 宮田 恒順

《法話部分例》

（本尊を拝する姿から参集の方々の方を向き、合掌低頭を行う。後、左記に続く）

ただ今、○○さまの三回忌のご法要を行いました。皆さま方におかれましては、様々に取り巻く状況がある中で、このようにご法事の間を整えていただきましたこと、誠に尊いお姿でございます。皆さんそれぞれの御事情を、「○○さまの三回忌だから」と御心を向けていただいた事と存じます。お寺としても、そのお姿は有り難く思いますが、仏さま方はどれほど喜ばれておりますでしょうか。今まさに西方極楽浄土にいらっしゃる○○さま、そして阿弥陀如来さまが心から喜ばれていることと存じます。

（一拍間を置く）

○○さまは悩み苦しみの無い清らかな仏さまの世界、西方極樂浄土へと往かれました。その場所から、私たちが阿弥陀如来さまにお念仏をおとなえする姿を、その目でご覧になり、その耳で声を聞いてくださいます。ご法要では、「○○さま、どうぞお浄土で穏やかにお過ごしくださいませ。菩薩さまとしてご精進されてくださいませ」とお念仏をおとなえ致しました。私たちがお念仏の声を、想いを届ける時に、仏さま方もまた声をかけ、想いを向けてくださっているのです。私たちと先立った大切な方の繋がりが消えてしまうことは決してありません。これからもその日々は続いて参ります。

皆さんが日々を暮らす中で、嬉しかったこと、笑顔が溢れることがありましたら、どうぞ手を合わせてご報告なさってください。先立った○○さまも、阿弥陀如来さまも、一緒に喜んでくださいます。その日々の中では苦しみや悲しみで、涙がこぼれる時もあるかと思ひます。その時には、涙を流すこの「私」に、○○さまも、阿弥陀如来さまも優しく寄り添ってくださいます。私たちが流す涙は決して一人で流す涙ではございません。声にならない苦しみも、汲んでくださる御方がおります。私たちのこの目には中々見えなくとも、この耳には中々聞こえなくとも、「辛かったろう」「苦しかったろう」と寄り添い励まし、一步一步日々を歩む私たちを見守っていてくださるのです。このご法要を終えられて、それぞれの生活に

戻られてからも、どうか覚えていてください。私たちが歩む日々は、仏さまと共に歩む日々です。寄り添いと見守りの中、お念仏となえる日々の先で必ずまたお浄土で大切な方とも再会が叶うのです。

どうぞこのご法要を機縁として、〇〇さまの見守りの中、私たち自身の命の行き先もまたお浄土なのだとし心を定めて、日々阿弥陀如来さまにお念仏をおとなえください。それでは、これからも私たちのことを見守っていただき、導いてくださいと想いを込めて最後に十遍のお念仏をおとなえさせていただきます。「同称十念」の声に続いて、ご一緒におとなえください。合掌をお願い申し上げます。

(ゆつくりと威儀を整え合掌し、一拍間を置く)

「靈位〓回忌 追善菩提 同称十念」「如来大慈悲哀愍護念 同称十念」など

《法話のポイント》

*相手に向き合う

法話を行う時には、必ず相手とその状況に向き合う様、心掛けております。コロナ禍では多くの方と共に法要を行うこと自体が難しく、施主の方には様々な苦勞が募ります。また大切な方を見送っていくにあたっては、看取りや葬儀を思うように行えず、喪失感や不安を抱えている方も大勢いらっしゃると思います。

たった一人で寂しく逝ったのかという不安には、阿弥陀さまをはじめ多くのご先祖さまが臨終の際に來迎してくださることをお伝えできます。浄土では病の苦しみや恐怖に囚われることはもう決してないと、極樂の様相を交えてお話することもできます。大切な方を見送る寂しさや悲しみは計り知れないものがございますが、遺された方々と浄土に往き生まれた方の繋がりや決して消えることはなく、再会の叶う日まで、これからも共に歩んでくださることについて部分例では触れさせていただきました。コロナ禍であったとしても、感染状況が落ち着いていたとしても、目の前の参集の方々にはそれぞれの状況があり、不安や迷いといったそれぞれの思いがあります。その姿に寄り添いながら法を伝えることが肝要と考えてお

ります。

*様々な場面における法話

法話を行う場面についてもよくよく考えなくてはいけません。葬儀式、通夜、年回忌の法事はそれぞれにお話の内容が変わります。またインターネットやSNSを用いた法話が普及し、布教の方法や可能性が広がったように思います。その反面、他人のプライバシーや著作権、そしてインターネット上に残るお話ですから出典や引用元をしっかりと精査する必要性、法の尊さを損なわないように内容を考慮して臨む必要などがあると考えております。

*自信教人信

どれだけ時代が変わっても、状況が変わっても、頼りとなる御教えは変わりません。伝えるべき御教えの内実は決して変わりはないのです。向き合う相手と状況を鑑みて言葉や話の運び、伝え方を種々模索することは大切ですが、自分自身の浅智慧で教えを曲げたならばそれは法話ではなくなってしまうと先達の先生方にご教導いただきました。自らが信じる西方極楽浄土のこと、阿弥陀如来さまのこと、お念仏のことを、相手に向き合い真摯に伝える

ことが肝要です。その法話が相手の真の幸せ、真の頼りへと続く道となります。

布教実例「無常の世だからこそ」

静岡教区 大善寺 山田 雅宣

他坊 別時前

一昨年より本当にたいへんな日々が続いています。新型コロナウイルス感染拡大に伴い、私たちの日常が大きく変わりました。

サラリーマンの皆さまは会社ではなく、ご自宅でお仕事をする方が増えました。スーパーのレジ待ちのときも、前の方と適度な距離を取らなくてはなりません。ソーシャルディスタンスという言葉もよく聞くようになりましたね。一年を通してマスクをつけるなんて考えたこともありませんでしたが、今は季節に関係なくマスクなしでは外出もできません。これまでの日常が、大きく変化してゆきました。

しかし、決して変わらないものもあります。それは南無阿弥陀仏となえたならば、阿弥

陀さまが必ず西方極樂浄土へと迎え摂ってください。そして、そのお浄土では、先に往かれたかけがえのない方との再会を果たすことができる。この浄土宗の御教えは、たとえコロナ禍であろうとも絶対に変わることはありません。

昨年の八月、東京にお住まいのお檀家さまからお電話がありました。両親がコロナに感染し、相次いで亡くなってしまったというのです。

もともと地元にてご夫婦二人で生活されていましたが、体調などの不安もあり、数年前から娘さまを頼って東京で暮らしておられました。ここ最近はお二人で同じ施設に入居されていましたが、そこでクラスターが発生してしまったのです。

コロナ禍ということもあり、娘さまはご両親の最期を看取することはできませんでした。大切な方が苦しむ中、手を取ることも、言葉をかけることもできません。コロナは大切な方との最期の時間すら奪ったのです。日本中、世界中で起きている出来事です。

緊急事態宣言中ということもあり、こちらからかけつけることも、来ていただくこともできませんでした。

娘さまはご両親に寂しい思いをさせてしまったことをたいへん悔やんでおられました。

電話でのやり取りしかできず、互いに混乱している中、娘さまの方から、「私には南無阿弥

陀仏しかとなえることができませんが、今はそれだけでよろしいでしょうか」という言葉がありました。

以前、亡くなられたお父さまは世話人を務めてくださっていました。お施餓鬼などの法要には必ず参列してくださり、本堂で一緒にお念仏をおとなえしてきました。東京に引っ越しをされた後もお盆はもちろん、年末年始などにも必ず娘さまとお墓参りをされるお姿がありました。そんなお父さまでしたから、ご自宅のお仏壇の前でも、お念仏をと覚えてくださっていたのでしょうか。そのお念仏の声を娘さまは横で聞いてこられたのでしょうか。

私は、「お念仏だけで十分です。お念仏こそが大切なんです。ご家族の皆さまがおとなえる声を聞いて、阿弥陀さまが必ずお迎えに来てくださります。阿弥陀さまはお二人に絶対寂しい思いをさせません。そして、ご両親は互いに手を取り合いながら一緒にお浄土に往かれるんです」とお伝えしました。

すると娘さまが「そうですか。なんの供養もしてやれないことが可哀想で……。お念仏でよろしいんですね。二人はこれからも一緒なんですよ。それを聞いて安心しました。さっそく南無阿弥陀仏とおとなえます」とおっしゃってくださいました。

その後、緊急事態宣言の解除を待ち、10月、ようやくお二人のお葬儀を勤めることができ

ました。

コロナという病気で命を落とす未来を誰が想像していたことでしょうか。しかし、いかなる状況であろうとも、お念仏の御教えは決して変わることはありません。どのような場所であっても、どのような最期であっても阿弥陀さまは必ず迎えに来てくださるのです。

この度のお檀家さまとのご往生に接し、いつでもどこでも誰にでもおとなえすることができるからこそ、尊いお念仏。その声に応えて、必ずお迎えにきてくださる阿弥陀さまの頼もしさを改めて感じたのです。

先日、娘さまがお寺を訪ねてくださり、「今でも毎日欠かさずお仏壇の前で、大きな声でお念仏をとなえていますよ」とおっしゃってくださいました。ご両親との予期せぬ別れという悲しみの中、お念仏をとなえ続けてくださるお姿がありました。

これから先も私たちは無常の世を生きてゆきます。どんな形で最期を迎えたとしても、これまで私たちが見送ってきたかけがえのない方々が、阿弥陀さまと共に駆け付けてくださるその時、この世では伝えきれなかった「ありがとう」や「ごめんね」を互いに手を取り合いながら伝え合うことができる。この世でのお別れでおしまいではなく、お浄土という続きが必ずある。阿弥陀さまがいらっしゃるからこそ抱くことができる私たちの希望です。

あらゆるものが絶えず変化し、少しもとどまることがありません。しかし、お念仏の御教えは今までもこれからも変わることは決まてないのです。

無常の世を生きる私たちだからこそ、阿弥陀さまとのご縁を手放さぬよう互いにお念仏を称え続けて参りましょう。

※どのような社会状況であろうとも決して変わることのないお念仏の御教えについてお取り次ぎ致しました。

※娘さまにお名前など、特定される要素を伏せることを条件に記載することの許可を頂きました。

※本文の内容とは直接関係ありませんが、コロナ禍という経験したことのない状況にどのように対応すればよいのか戸惑いました。その中で、せめてご家族さまが手を合わせ、お念仏をおとなえしやすいうにと、お戒名を記した白木の御位牌と名号の書かれた紙をすぐに送付致しました。またお電話でお伝えした内容を改めて記したお手紙を添えました。

布教実例

「穏やかな日暮らしを、不安や恐怖に負けない心」

京都教区 西遊寺 和田 恵聞

令和二年の三月末、日本赤十字社は新型コロナウイルスの感染拡大に伴う社会の乱れに対して「新型コロナウイルス三つの顔を知ろう！負のスパイラルを断ち切るために」というガイドラインを作成しました。

このガイドラインには、ウイルスがもたらす三つの感染症の顔があると記されています。一つ目は、病気そのものに対する注意が必要だと記されています。手洗い、うがい、マスク着用などの予防対策が重要ということです。

二つ目は、まだまだ解からないことが多い病に対して、時に必要以上に強い不安や恐怖を感じ、振り回されてしまう事に注意が必要と記されています。

三つ目は、見えないウイルスへの不安を、特定の見える敵と見なして嫌悪の対象とし、差別や偏見の意識を持ち遠ざけることで、つかの間の安心感を得ようとする心に注意が必要と

記されています。感染者に対する嫌がらせが、まさにその例です。

この三つのうち、一つ目については医療従事者や研究者の方々が研究を重ね、このウイルスを克服するために日々ご尽力なさっています。

では、二つ目の必要以上の不安や恐怖、またそこからくる三つ目の差別や偏見はなぜ起くるのでしょうか。その原因は「煩惱」です。「煩惱」は悪い人だけが特別に持ち合わせているものではなく、誰からも好かれる良い人だからといって持ち合わせていないわけでもなく、すべての人が持ち合わせているものです。

煩惱の中でも特に、「毒」と言われるほどに私たちに害を及ぼす「三毒」は要注意です。

「三毒」とは「貪欲」「瞋恚」「愚痴」のこと。

「貪欲」とは、あれもこれも欲しいと願う貪りの心。バイキングやイチゴ狩りなどの食べ放題で「元を取るぞ」と意気込むような欲から始まり、人のお金を騙し取ったり盗みなどのニュースになるような犯罪行為、地位や権力の為に相手を叱責したりウソをついたりといった貪欲の心が、時に体や口にあふれ出てくるのが私たちです。

「瞋恚」とは、腹が立つなどの怒りの心。普段穏やかに生活をしていても、自分の思い通りにいかないと、怒り任せに相手を罵倒し、ひどい時にはカッとなり暴力を用いて怒りをぶ

つけます。「私はそんなことない」と思っている、自分の大切な人や物を傷つけられた時に、穏やかでいられない自分に気づきます。

最後の「愚痴」とは根本的な煩惱ともいわれ「ありのままの姿をありのままに」受け取ることができない心をさします。

例えばコップに水が半分入っています。多いでしょうか。少ないでしょうか。「多いも少ないもない。半分は半分」そう思えたら、ありのままの姿を受け入れる事ができています。頑張つて働いて帰った後の至福のひと時に、ビールを注いでいただいたとしましょう。それがコップに半分するとき「多いも少ないもない」とは受け取ることのできない私がいます。自分中心に物事を考えるのが、煩惱の根本です。自分中心に考えるから、マスクが不足していると感じれば、「とりあえず少しでも多く」と貪り、「○○警察」という言葉が流行するように、自分の決めたルールを破る人を叱責し、時に暴力や嫌がらせにまで発展するのが煩惱を持つ私たちの姿なのです。

ではどうすれば、この煩惱を抑え込むことができるでしょうか。人と比べていても、貪りや怒りは治まりません。「あの人よりも多く……」「私は頑張っているのにあの人……」となってしまう。そういうった思いを抑えるために仏さまの前に座り、わが身を振り返るの

です。仏さまの前に座って、自分の心や行動を振り返ってみましょう。

浄土宗を開かれた法然上人は、私たちの心を「一人一日のうちに八億四千の念あり 念々の中の所作皆これ三途の業なり（『登山』）」とお伝えくださいました。つまり、「私たちはいろいろなことを考えるけれども、それらは地獄（餓鬼・畜生道）に落ちるような悪いことばかりである」とご指摘くださったのです。

仏さまの前に座り、よくよく自分を振り返ってみるとその意味がわかります。心を落ち着けて自分自身を振り返ると、至らぬ自分に気づかせていただけます。「あの人は……」から「自分は……」へと。

その対象が変わった時に、多くのことに気がつきます。気づくことで自然と、「懺悔」の心が生まれます。懺悔の心が煩惱をしずめてくれるのです。

浄土宗日常勤行で勤められる「懺悔偈」。

我昔所造諸悪業 皆由無始貪瞋痴 従身語意之所生 一切我今皆懺悔

私が昔から作ってきた数々の悪業は、遠い昔から持ち合わせている、貪欲、瞋恚、愚痴によるものです。これらは私の体や口、心によって生まれたものです。今、そのすべて

を懺悔いたします。

勤行ではそのあとに、懺悔のお念仏を十遍申します。まさに、仏さまと向き合い、自分自身の至らなさに気づき、懺悔し、懺悔の気持ちを込めて十念をおとなえするのです。

法然上人は「悪を制するは、必ずしもこれをとどめえざるものは、念仏してその罪を滅せよとすすめたる也（「十二箇條の問答」）」（煩惱を抑えようとしても、どうしても抑えられない者はお念仏申して罪を滅しなさいと仏さまが勧めてくださっています）と説かれました。

仏さまの前で、自分自身を振り返り、罪に気づき懺悔し、お念仏申すことは、コロナ禍で必要以上の不安や恐怖に振り回されずに、自身を支えていく大きな力にもなっていくのです。

浄土宗の大本山百萬遍知恩寺の御影堂には、堂内を囲むように千八十顆の大きな数珠が祀りされています。由縁は後醍醐天皇の時代、元弘元年（一三三二）、近畿内に大きな地震が起きました。それがもとで疫病が流行し、多くの死者が出ました。天皇陛下の勅命により、知恩寺第八世の善阿空圓上人は宮中に参られ、七日七夜（一週間）お念仏をおとなえ続けたところ、功あつて疫病が止まりました。そのお念仏の数が百万遍におよんだことから「百萬遍」の勅号を、また弘法大師筆の「大利剣名号」の軸、そして五百四十顆の念珠を下賜され

ました。「大利剣名号」とは南無阿弥陀仏の六字の名号を、字画の末端を剣のように鋭くして悪因縁を断ち切るように書いたものです。南無阿弥陀仏とおとなえすると利剣が煩惱を断じるように罪が皆除かれる。お念仏申すことで、煩惱で積もった心の垢を、そぎ落としてくださるのです。

コロナ禍において私たちの生活は一変しました。こういった不安多き時代だからこそ、私たちは互いに思いあい、尊びあいながら歩んでいくことが必要です。頭ではわかっていながらも、なかなか行動できない、長続きしないのも私たちです。だからこそ、仏さまの前に座る習慣をつけることが大切なのです。仏さまの前に向かい、自分自身と向き合うことで、心が落ち着き自身の心や行いの至らなさに気づき懺悔し、お念仏申す。またお念仏申すことにより、自身の至らなさに気づかせていただけます。

利剣名号は、お念仏には煩惱を切り刻む功德があることを伝えてくださっています。このお念仏の功德こそ、コロナ禍の不安や恐怖、そこからくる他者への差別や偏見を制し、他者を尊び、思いあい、共に歩んでいく大きな力となっています。

ウィルスの終息は見えなくとも、自身が心穏やかな日暮らしを送れるよう日々お念仏に精進させていただきましょう。

布教実例「となえ続けてわかること」

大阪教区 法藏院 荻安 卓也

昔から「早起きは三文の徳」と申しますが、いつもより少し早く起きるだけで、時間が有効に使えます。本を読むもよし、絵を書くもよし、散歩をするもよし、どれも続けるうちに、今まで意識しなかったことに気づけるのかもしれない。もしよろしければ、早起きをはじめてみませんか。

私が早起きをしてすることといえば、何といっても、決めた数の念仏を本堂でおとなえすることです。時には、寺を離れることもあります。そんな日は、旅先の布団の上で手を合わせて目を閉じます。すると、まぶたのうらに本尊さまのお顔が浮かんできて、一日のはじまりを温かい気持ちで迎えることができるのです。つらく悲しいこともあります。が、「南無阿弥陀仏」と念仏をとなえて、阿弥陀さまの見守りを支えに暮らしています。

毎日の勤めとして数を決めてとなえる念仏のことを「日課念仏」と申します。たとえば、

一日十遍と決めて一年間続ければ、実に三千六百五十遍もの念仏を称えたことになるのです。「継続は力なり」といいます。まずは、続けられそうな数を目標にしてみてください。仮になまけてしまったとしても、阿弥陀さまは私たちを見捨てたりなさいません。おこたった次の日から、また続けてまいりましょう。

日課念仏といえば、法然上人は「極楽に救われることを願って念仏をとなえていると、あらゆる仏や菩薩、神々が、よりそって守ってくださいます。そして命が終わる時には、必ず極楽に迎えていただけるのです」とおっしゃっています。

想像してみてください。阿弥陀さまはもちろん、お釈迦さまや観音さま、勢至さま、そして神々に守護されるのです。こんなに心強いことが他にあるでしょうか。ドラマや映画で見ると、屈強な警察官に守られている要人の比ではありません。仏さまや神さまが、私たちを取り囲み、災いを払いのけてくださいます。

みなさまは、さまざまな神社仏閣にお参りされると思いますが、それは無病息災や家内安全のご利益を求めていることでしょう。念仏を続けておられる方は、わざわざ参拝して祈らなくても、家に居ながらにして仏菩薩や神々から守られています。まずは、一日十遍からはじ

めてみてください。となえ続けることによって、感じていただけるものが必ずあります。私たちは、神仏の見守りに気づかず暮らしているのではないのでしょうか。目に見えるものばかりにとらわれず、大いなる力を信じていただきたいと思います。

ある經典に、「不求自得」という言葉があります。求めていたわけではないが、知らず知らずのうちに良い結果を招くという意味です。

昔、ある水泳選手からこんな話を聞きました。「私が高校二年生の頃、一年生の指導をされた時のことです。当時の私は大会をひかえていたので、そんな時間があるのなら自分の練習がしたいと思っていました。最初は、嫌な役を押しつけられたとふてくされていましたが、指導を続けるうちに不思議なことがおきました。なんと自分の記録がよくなったのです。好成績で大会を終えた私は、無意識に正しい泳ぎ方の再確認ができていたことに気づきました。後輩のためにしていたことが、実は自分のためになっていたのだと分かった時、あらためて基礎練習の大切さを学んだのです。あの時、指導係を任せてくださった先輩に、今も感謝しています」。

まさに不求自得のお話です。この方は得られたことに気づかれましたが、私たちは気づか

ずに暮らしているのではないでしょうか。極楽に救われることを願って念仏をとなえていると、仏菩薩や神々に守られるというのも不求自得なのです。残念ながら目には見えませんが、確かに守護してくださっています。

南無阿弥陀仏とは、「助けてください阿弥陀さま」という意味です。阿弥陀さまの力を信じてとなえると、必ず極楽に救っていただけます。さらに、法然上人は「念仏をとなえていると、重く受けるはずの病気を、阿弥陀さまが軽く受けるようにしてください」とお示しです。

ある女性のお話です。「この間、お墓参りの帰りに、あわてて電車に飛び乗った時、うつぶせに倒れて腕の骨を折りました。家族は、なぜ仏さまは守ってくださらなかったのだと言いました。私は、守っていただいたからこそ、この程度で済んだのだと思っています。本当にありがたいことです」。深い信仰の中で暮らしておられるお言葉に、心が洗われました。阿弥陀さまは、念仏者を災いから守護し、重く受ける病気を軽くし、死後は極楽に迎えてくださいます。南無阿弥陀仏には、それほどの功德があるのです。にわかには受け入れがたいことだと思いますが、どうか阿弥陀さまのお力を信じて念仏をお続けください。仏さまの

存在を感じて生きていくことは、必ず人生の支えになります。となえ続けてこそわかること
があるのです。極楽に救われるその日まで、共々に念仏をとなえ、加護をいただいて暮らし
てまいりましょう。

合
掌

布教実例「今日という日を心丈夫に」

福岡教区 無量寿院 三浦 泰道

皆さま、本日はようこそお参りくださいました。どうぞお身体はお楽に、お付き合ってください。

お互い、マスク姿というものに慣れてしまいましたね。新型コロナウイルスが広まり、この疫病と共に暮らし、付き合っていくという意味のウィズコロナという言葉が生まれました。

これもその付き合い方の一つでしょうか。令和三年に全国有料老人ホーム協会に寄せられたシルバー川柳があります。不安、不満を笑いに転じる先人の工夫、川柳。コロナに関する入選作品をいくつか紹介します。

「密です」と言われてみたい 頭頂部

食卓に 俺の席だけ アクリル板

午後八時 酒提供を 止める妻

さり気なく 背後に賞状 オンライン

薄味に したらコロナと わめく祖父

その光景が目に見えよう。コロナ生活の息苦しさを和らげてくれます。

ただ、いざ自分が濃厚接触者になった、感染したとなった時、どうでしょうか。川柳を味わう余裕はなくなり、見ても笑えないどころか、不快に感じるかもしれません。

私たちは普段、コロナや災害をどこか他人事として遠ざけ、その不安をも遠ざけようとしています。全国の感染者が減っては安心し、増えては不安になる、揺れ動く心です。

しかしいざ疫禍の当事者として自分事になれば、「何で私がこんな目に」との不安や不満で一杯の素顔の私にきつとなるはずです。

素の私がおすがりできるのが、阿弥陀仏さまです。阿弥陀仏さまは、自分で自分の不安や不満、煩惱を振り払えない私たちをこそ救ってくださる仏さまです。阿弥陀仏さまは、「自分を信じて」「南無阿弥陀仏」とおとなえする者は皆、極楽浄土に救うぞ」という本願を成就

された仏さまです。極楽浄土は、誰もが安らぎに満ち、お互いに善い行いを積みあえる世界です。

常に安心と不安の間で揺れ動く私の心を阿弥陀仏さまの本願の中に安置して、動じない安らいだ心を頂戴するのがお念仏の心です。この心を区別して特に、安心と濁^{あんじん}って読みます。

法然上人は、この心と行とを一致させよ、どちらが欠けてもならないとお示しです。

喻えるなら安心は眼、お念仏の行は足です。目的地があるから、力強く歩む事ができます。そして歩むその一歩一歩が、「自分は目的地へとちゃんと歩んでいるのだ」と次の一歩を踏み出す心を強くし、目的地へと辿り着きます。即ち今日がどんな一日でも、それは間違いない極楽浄土への確かな一日を歩んでいるのだと心丈夫に安心を頂戴して、日々お念仏を行じ歩みます。そして同時に、日々お念仏を行じ歩む中で、その心丈夫さに安心がより深まって頂戴できるようになります。

平成三十年八月二十二日付けの西日本新聞に、佐藤友則さんという七十三歳の男性の方が投稿された文章を一部紹介します。男性の祖母が孫たちの語り部として言葉を伝えます。

「この世のすべてが最後はうまく収まっていく」「案じることはない、すべての現在が、

みな川に流れて海に着いて、よい最後、よい結果を迎える」「よい最後を迎えられる者は、だから、いつもよい途中にいることになる」

孫たちが日々叱られるような悪いことをしても「案じることはない」「お天道さまのようににこにこして暮らせ」と。お婆は身の回りに起こるあまたの不幸を川に流して、けろりとしていた。(中略)

夏。時折、城原川(近場の川)にハヤ釣りに行く。増水時には雑多な物が流れてくる。芥もごみも。流れて流れる力になる。ゴールは海。(後略)

おばあさまのお姿、「よい最後を迎えられる」という確信は、そこに至る日々をも心強くしてくれる。芥もごみも流れて、それが流れる力になる。私はそこに、お念仏に通じるところがあると受け止めています。

困難に晒され煩惱に苦しむ素の私が、阿弥陀仏さまの本願の働きで極楽浄土という間違いない世界に必ず参らせていただけるのだという安心は、そこに至る今の日々を尊く心丈夫に生きる道標です。そうは言っても芥やごみの様な煩惱多きこの私、しかしその煩惱さえも、そのまま救うぞという阿弥陀仏さまの大きな本願に包まれています。本願のお念仏で、日々

煩惱がそのまま阿弥陀仏さまへの想いとなり、安心を深めてくれるのは尊い事です。芥やごみは海を汚しますが、私たちは極楽浄土にて清らかな身とならせていただけます。たとえ疫禍や災害に遭う日が来ても、その一日もまた極楽浄土へと連綿と繋がっているのは心丈夫な事です。

刻一刻と変わる現代社会に対応していくことも大切ですが、自分の行く末を自分事としてしっかり見据え、今日一日を尊く捉えなおす事も大切です。法然上人のお言葉を今一度頂戴し、お互いに疫禍の中でも心丈夫に生きるお念仏生活を深めて参りたく存じます。

それでは最後に十遍のお念仏をおとなえして、私の話をおわらせていただきます。

(同称十念)

布教実例

「文書活用による布教例」保健医療従事者に贈る言葉」

東京教区 浄心寺 佐藤 雅彦

布教の方法には、さまざまな形式があります。伝統的な法会や、日常の法要での法話など、素朴に「私たちお坊さんが檀信徒の皆さんの前でお話しする」という従来の形式のみでは、十分な布教を提供できないような状況が、このコロナ禍の社会では引き起こされています。「和尚さん、オンラインで中継して、遠方の親戚に法要に参加させてやりたいのですが」。

このようなリクエスト、いつかは到来と思っていましたが、まさかこんなに早くに、オンラインの波が押し寄せてくるとは思っていませんでした。

「浄土宗教師はみな布教師」という前提に立てば、多様な方法論やスキルを提示していく必要があるはずです。私の布教実例では、対面でも用いることの可能な「文書を活用した」事例を紹介したいと思います。

拙寺の所属する「東京教区」では、教化団が中心となり、「コロナ禍に向き合う」ことに特化したリーフレット『新型コロナ感染症の時代・仏教の智慧を生かし「幸せ」に向かって生きる』(195mm×95mm×8頁)を作成しました。その中で、①「どうしてこんなことに」と題して「コロナと出会った」ことに対する問題を提起し、②互いに苦しみを分かち合う「同事」、③思いやりを実践する「布施の実践」④施設におられる家族への「祈り」等々を順次あげ、⑤法然上人がおられたら、お念仏をすすめられたであろうことを表現いたしました。文書による布教には、受け取った方がそれを読み、そして反応に至るまでの時間差が対面式の布教とは異なり、独特の有難さを運んでくれるという利点があります。教化団の作ったこのリーフレットを、菩提寺の住職から手渡され、出版元の教務所に「有難かった、感動した」と、その反応が届けられた時、制作に携わった仲間と法悦が共有できました。布教をする側、聞く側の双方に感動が伝わることで、布教に対する意欲が掻き立てられます。文章をさまざまなメディアに掲載することで、発信が可能な時代となりました。不特定多数の人に伝わることによる危険性があるものの、ある一定の職種や問題意識を持つ人々へ発信できる強みがあります。以下にその具体例としての法話をあげてみます。

事例①「どうしてこんなことに」→コロナに会ってしまった私たち」

私たちが生きる人生は、「どうしてこんなことに会わなければならぬのか」というような出会いが、しばしばあります。人生のなかのさまざまな出来事はもちろん、この新型コロナウイルス感染症という病気との出会いもそうです。よりによって、自分や自分の家族が感染してしまう、という現実もありましょう。こんなに気を付けて予防していたのに、という人も少なくありません。このような「わからないけれど、出会ってしまった」ことを何と呼ぶか？ お釈迦さまの教説によれば「縁起」の理法といって、物事はみな「因縁によって出会う」というのです。「因縁」は因と縁とに分けられ、因は直接的な出会い、縁は間接的な「わからないけれど出会う」出会いを指し示します。その時、多くの日本人は、縁というものは、良きことと出会ったときに「縁があった」というのではないか、と思い違いしていることです。「良きことと出会う」の「良」は、誰が「良」と言っているのでしょうか？ それは他でもない、自分にとって都合の良いことを「良い縁」と表し、自分を中心とした見方をしているのです。真実のお釈迦さまの教えは、「良い」「悪い」という自己の判断を超えた「わからないけれど出会ってしまった」事実を、縁による出会いと教えられたのです。

まさにこのコロナ禍もそうです。マスクもしない人がコロナにならなくて、こんなに氣を付けている私が、コロナになった、というのは、こうした自然の摂理の中での出会いがあるからなのです。だからこそ私たちは、いつでもどこでも阿弥陀さまのお見守り、護念をいただける「南無阿弥陀仏」のお念仏を心の支えにして生きる必要があるのです。

阿弥陀さまといつも一緒と信じ、おとなえいただくことができれば、今あなたが感じておられる不安も、いささかなりとも軽く感じられるはずです。どうぞ一緒にお念仏を申しましよう。

合掌 十念

事例② 保健医療従事者のあなたへ

日々、新型コロナウイルス感染症の方々に向き合い、時にご自身の生活を犠牲にしながら、またわが身の危険にさらされながらも、多くの人々のいのちを支え、助けてくださっている保健医療従事者の皆さんに、心から敬意を払い感謝を申し上げます。仏教では、生きとし生けるもの「衆生」のために、誓いの願を立てて、その行いを遂行する存在を、菩薩と称して大切に崇拜します。皆さんは、もちろん当たり前の人間でありながら、その職業を通して関わる

人々のいのちを守り、支え、救う行為に直接携わる行為は、まさに菩薩行の実践を行っていると思えます。関わった縁ある人々を救って差しあげたいというその志に對して、心を込めてエールを送りたいと思います。

日本では「ロウソクは我が身削って周りを照らす」といって、その行為を燈明の光に例えて大切にしてきました。浄土宗の本尊・阿弥陀如来は、全ての人々を救うために菩薩から仏へと修行を完成させ、浄土宗を開きになった法然上人は、誰もが救われる念仏の道を弘められた方でした。ともどもに今日をこうして生きることできることに感謝し、祈りの中で病む人々を支えていたきたいと願うものです。

しかし残念ながら、大切に接せられた患者さん等が亡くなられることもあるでしょう。どうぞ、誰をも阿弥陀仏はお救いくださることを思い起こし「南無阿弥陀仏」とおとなえし、関わられた方が阿弥陀仏のお迎えをいただけますようお願いいたしたいものです。

合掌 十念

※私たちの布教は自らが「浄土宗の檀信徒」としての自覚を持つ方ばかりではなく、仏の言葉に触れることで、法然上人の教えや念仏に出会われることもあるものです。このような職域にある方々に、支援の布教の種をまくことも大切と受け止め、事例としてあげさせていただきました。

あとがき

令和四年度の『布教羅針盤』をお届けいたします。手に取っていただき、さまざまな布教の一助になれば幸いです。「羅針盤」の名が示すように、大海を意味する混沌の時代の中で、正しい行き先を示すのは、法然上人の念仏であることを、本書の活用を通して、広く有縁の方々にお伝えいただければ有難いことです。

とりわけ今号では、「浄土宗教師はみな布教師」という根本的な立場を確認し、教師資格取得後、間もない教師にも活用できる内容を目指そうと、布教専門部会において編集を協議してきました。さらには今号のテーマを、このコロナ禍の世情を鑑みて「疫禍における浄土宗のみ教えの説き方」といたしました。

コロナ禍で苦悩する人々に念仏の教えを発信できるようにと、説諭を林田康順上人に、模範布教を中村晃和上人にご依頼申し上げ、まさに燈明となる素晴らしい原稿をお寄せいただきました。また布教の具体例では、気鋭の上人方に執筆をご依頼し、布教師の高座布教はもちろん、日常の法事・法会にて活用いただけるような法話例を提示いただきました。しかしコロナ禍は、本書の編集にも大きな影響を与え、膝を詰めて議論するこ

とのままならぬ、オンラインの会議を重ねることになり、この度の脱稿となりました。

布教が多様な方法をもつという意味では、伝統的な高座布教や文書伝道のみならず、オンラインやさまざまなメディアを利用した布教例も、さらに提示する必要があつたかもしれません。布教は、年回法要に集う寺院の檀信徒のみではなく、この疫禍に、学校に行けない児童や若者たちの不安定な心を支えるものとなる必要もあることでしょう。課題を看過することなく、次号以降の編集につながればと願うものです。いよいよ開宗八五〇年のご正当を目前とし、さらに広く深みのある布教の寄る辺となるような「羅針盤」にしていくためにも、皆さんの声を寄せていただければ幸甚です。

合掌十念

令和四年四月

布教専門部会部会長 佐藤雅彦

令和4年度 布教羅針盤

疫禍における浄土宗のみ教えの説き方

令和4年4月1日 発行

発 行 浄 土 宗

〒605-0062 京都市東山区林下町400-8
TEL (075) 525-2200(代)
FAX (075) 531-5105

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4
TEL (03) 3436-3351(代)
FAX (03) 3434-0744

発 行 人 川 中 光 教

編 集 浄 土 宗 教 学 部

編集協力 浄 土 宗 出 版

印 刷 (株) 共立社印刷所

表紙デザイン 藤原印刷株式会社

浄土宗宗務庁

©Jodo Shu, 2022 Printed in Japan
<https://jodo.or.jp/>



淨土宗